九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国古典様式家具の日本への受容過程に関する研究

石丸, 進

https://doi.org/10.15017/459015

出版情報：Kyushu University, 2005, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

第４章　中国古典様式家具の日本への影響

―坐臥具を中心として

第４章中国古典様式家具の日本への影響
― 坐臥具を中心として ―

言

具の床（牀）は寝床（寝台）であり，坐臥具として，日本の床や床
床几などとかかわりが見られる[注 1]。そこで，中国古典様式家具の
が日本に請来し，日本の家具形成に影響したという仮説を立て，坐
る床（牀）や榻そして凳を中心に比較検証するために，文献史料と，
村集落や明代の園林建築において継承され現存されている坐臥具を
て調査を行う。そして，中国椅子文化受容過程の中で，坐臥具に関
や形態の共通性や相違性を，実地調査により明らかにすることを本
とする[注 2]。

究方法

での予備調査[注 3，4]により，中国の坐臥具の中で床（牀）や凳（腰
日本の縁台や床几そして腰掛などと，類似性や共通性があることが
た。このことから，本研究ではさらに実地調査によって，名称や形
構造について類似性を検証して受容過程を明らかにする。
の調査地域の選定については，中国の主要な伝統的家具産地であり，
の発祥地である江蘇省蘇州地域の園林建築で実施する。中国の伝統
名称・形態と加工・用材に関しては，蘇州紅木雕刻工場［注 5］と上
の協力を得る［注 6]。また，上海市家具研究所[注 7]の協力をえて
の収集の協力や助言を受ける。坐文化の調査は，伝統的農村での生
継承していることを一つの条件とし，都市近郊地域と少数民族の山
二つの生活実態をそれぞれ調査する。
うに，実地調査と民族資料そして歴史的文献史料などによって，検
総合的な検知から，中国家具文化の日本への影響過程を坐臥具の牀
凳を中心として明らかにする。そのために，上記の条件を検討し，
実地調査は下記の伝統的坐臥具文化を有する地域で行う。
蘇州地域 ②貴州省凱里地域 ③陝西省西安地域 ④陝西省漢中地域

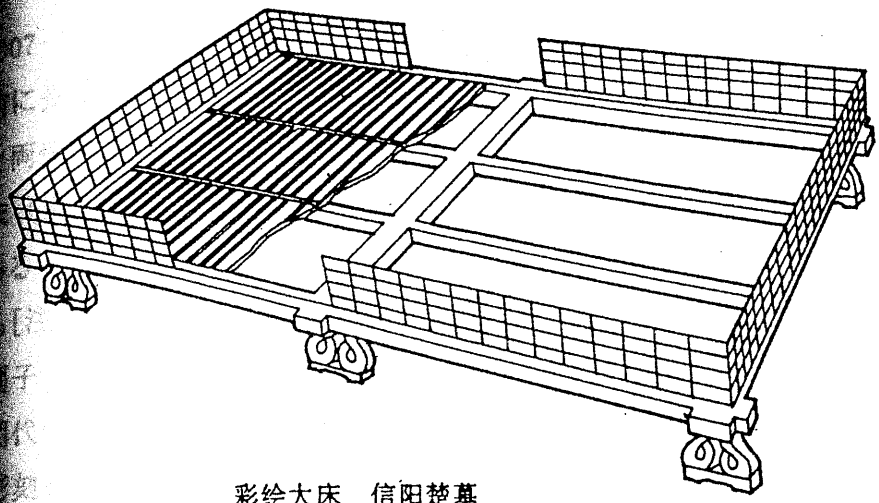
国の牀（床）や榻そして日本の床（床）

中国の牀（床）

漢代以前，人々は床に座り，席（むしろやござ）に膝をつけて座っ
。床は牀とも書き商時代に亀甲や獣骨に刻まれた甲骨文や金文中の
では牀は 丬丬 と表記した[注 9](図 4-1)。形象文字が示すように床
坐臥具であった。

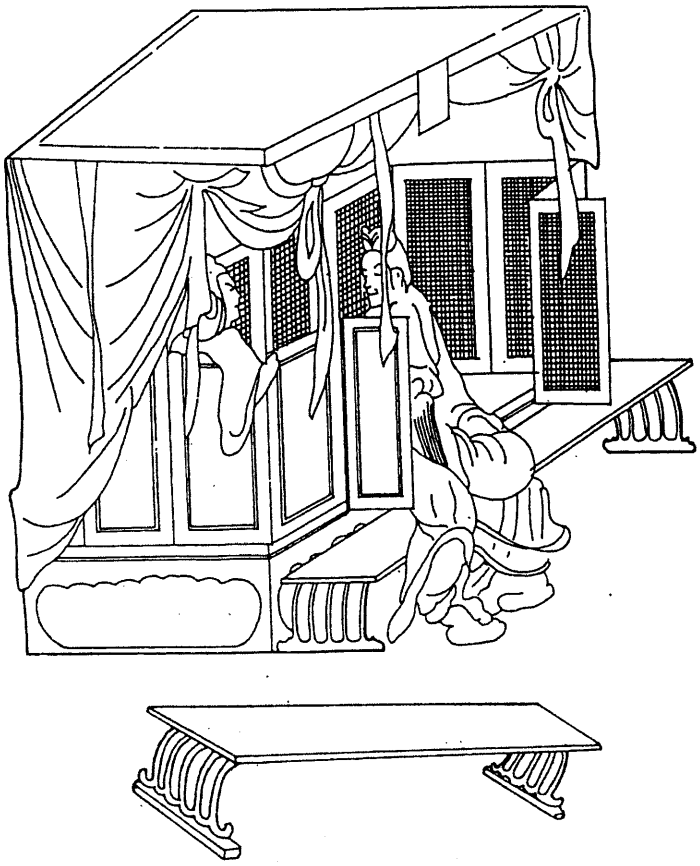
甲骨文や金文にみられる床の象形文字(李宗山著『中国家具史図説』)

い「床」の実物は，河南省信陽長台関出土の戦国時代（BC475 -BC221
彩漆大床である。この床の長さは 218cm×幅 139cm，六足で足の高さは
木製である（図 4-2)。床の上は引き出し式板で，周りに欄干があり入
後に設置されて，床全体に彩漆が施されている。技術的にも貴重な実
であるといわれている[注 10]。床は寝具と坐具を兼ねていたが，前漢
-AD25 年）には「榻」という専用坐具が出現した。漢代以後「床」は寝
の臥具を指し，榻は休息と客を接待する坐具の名称になった。『三才図
は，「榻は長狭いそして低いものをいう。三尺五寸のものは榻という，
ものは床という」とある[注 11]。現存する最古の伝世絵画『女史箴図』
東晋（317 - 420 年）では，大床（架子床）の中の女性が，の脚凳に
座した漢の成帝と話をしている(図 4-3)。大床の前にある坐具は食事
でもあり，床に登る脚凳（榻登）でもあり，宋代には床凳とも呼ばれ，
足案や木俎ともいわれた[注 12]。日本住居における，土間から床に登
と同一機能で，長腰掛や台の機能を兼ね備えている[注 13]。
省邗江蔡庄で，五代 (907 - 960 年) の墓から床(木榻)が出土している。
は副葬品であるが，千年以上埋まっていたが，実物の大きさで，完全
出土した。寸法は長さ 180cm×幅 92cm×高さ 50cm で，４本の足は曲線
され，意匠，接合技術，構造，装飾など，中国家具史に重要な意味を
われ，正倉院の御床と類似している形態である[注 14](図 4-4)。



彩绘大床　信阳楚墓

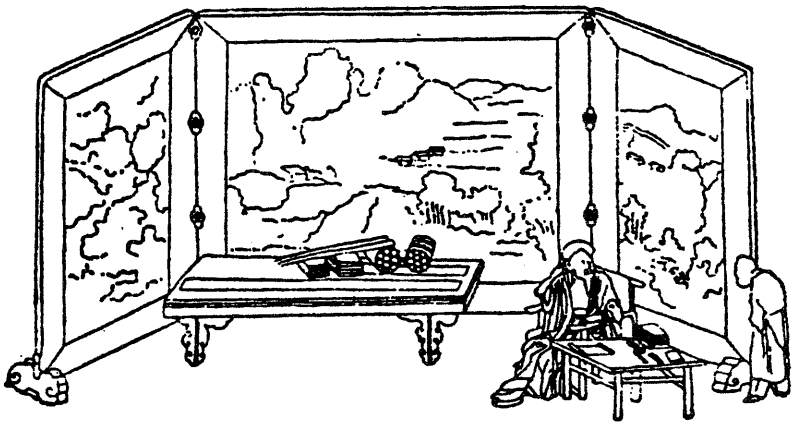
図 4-2. 河南省信陽長台関出土の戦国時代の彩漆大床
（胡徳生著『中国古代家具』）



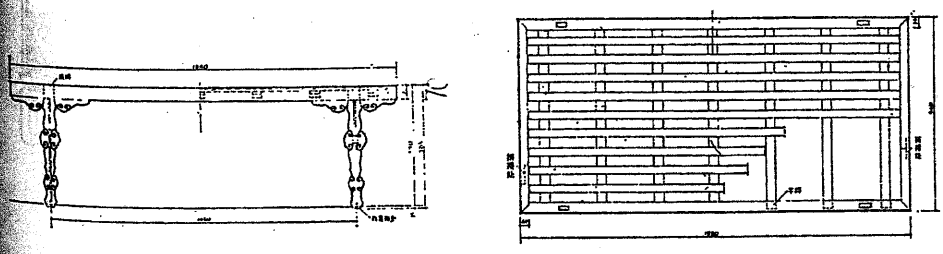
东晋画《女史箴图》中的曲足案

-3. 顧愷之の東晋画『女史箴図』にみる架子床と脚凳（東晋時代）
（胡徳生著『中国古代家具』）

907-960 年)の顧閎中著『韓熙載夜宴図』によると，床榻は五人が同座前に長卓を置き，ヨーロッパと同じテーブルマナーで，左右と後ろに両側に独板肘掛がある(図 4-5)。明代（1368 - 1644 年）には架子床床（出一歩）そして大床（大寝台）や榻の一種である羅漢床（三屏風ある（図 4-6)。中国の『三才図会』では,床の種類の架子床と榻を区別る[注 15]。架子床や大床は小屋に似て，上部に屋根を頂き，三方と入圍子（欄板）があり，帳を垂らして，主に南方で使用する。蘇州博物明代の抜歩床が収蔵展示されている。抜歩床とは大寝台で，寝台の前彫刻をした覆いがあり，それをくぐると寝台と同じ広さの前沿部があ台の両側には小さな櫃があり，下には抽斗がある。抜歩床とは八鋪床である。八鋪床と称されるのは，八人分用の布団を敷ける大床で，一長さが八歩分あるところから[注 16]，この名があるともいわれている鋪床の実在を実地調査では確認できなかった。



（ロ）五代の王斉翰『勧書図』にみられる木榻



（イ）木榻の立面図　間口 1880×高 585　木榻の平面図　間口 1880×奥行 940

4-4. 江蘇省邗江蔡荘の五代墓から出土した（イ）木榻と類似する（ロ）木榻

東増弼著『千年古榻』, 王斉翰著『勧書図』）（資料編 2. 3. 2. 五代木榻参照）

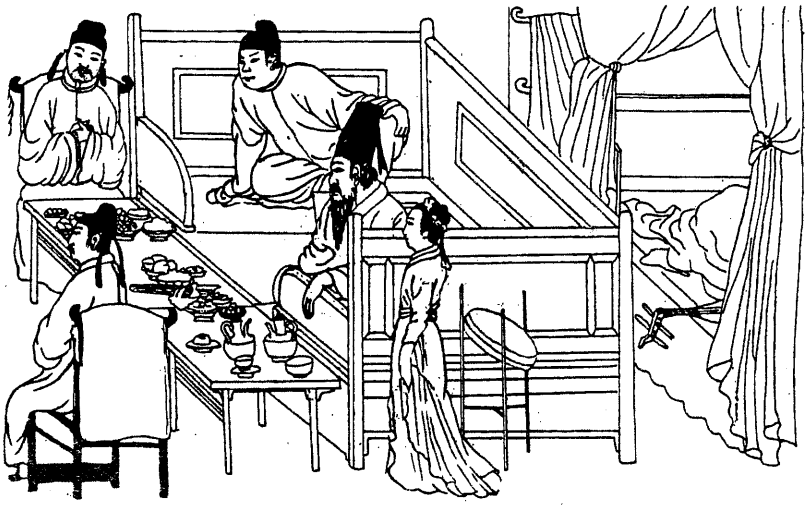
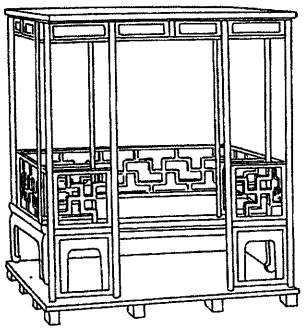
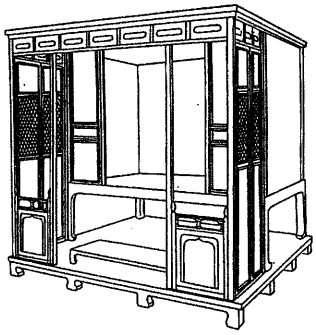


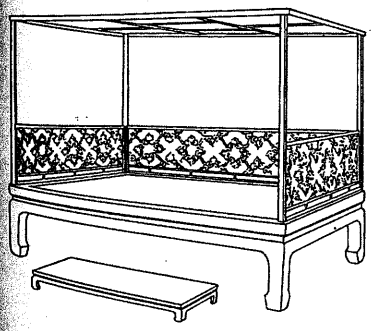
図 4-5.『韓熙載夜宴図』の床榻
（李徳善，陳善鈺著『中国古典家具』）



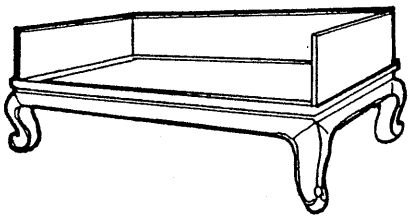
抜歩牀（出一歩）



大牀



架子牀

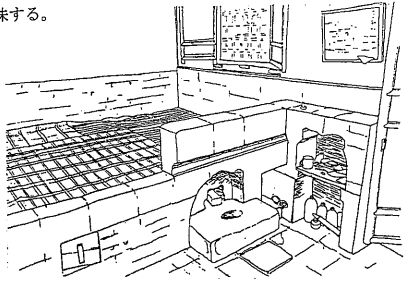


榻（羅漢牀：三屏風式）

図 4-6　明時代の抜歩床，大床，架子床そして榻（羅漢牀）
（張綺曼他著『室内設計資料集』）

(2) 中国の炕と炕卓

この江南地方では室内の寝床として木製の床（牀）が多く使用されるが，
より北方では，日干し煉瓦で作られた炕という造り付けの寝台を使用す
この面積は榻より大きく，牀である（図 4-7）。この炕は坐臥具や寝台で，
の場でもあり，食事の空間でもある。炕上で使用する卓が炕卓や炕几で
から盛んに使われた。その起居様式は日本の板床や畳や寝床での生活様
形性がある。この炕上で使用される炕卓（北方では飯卓）の形態は日
卓（唐木机）と同一形態で，座卓の源流といえる（図 4-8）［注 17］。
り，日本の起居様式における床は中国では床（牀）であり，中国の床（牀）
台を意味する。



炕

（車政弘 他著『党家村』中国北方の伝統的農村集落）

図 4-7　炕と炕卓

（石村真一著『まな板の発達にみる機能，形態，材質の変化』）

座敷机（座卓）

（大阪唐木指物協同組合資料）

上海博物館蔵の炕卓

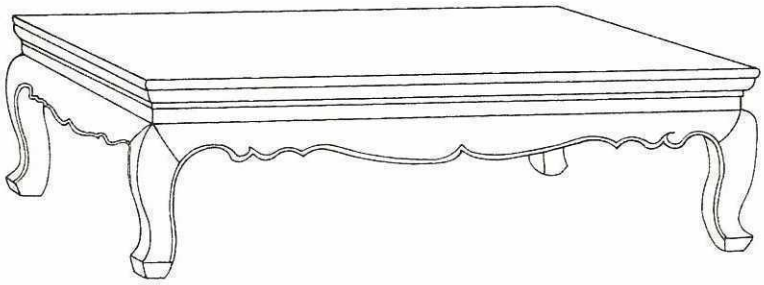


図 4-8　中国の炕で使用される炕卓と日本の座卓

（王世襄著『明式家具研究』）

日本の床（牀）

の原始から古代にかけての「床」の字はトコとよみ，坐臥具であり，で寝具としての寝床をさす言葉であった。正倉院に収蔵されている御聖武天皇や光明皇后が使用した寝台である。この御床はヒノキ材によ形の台に四脚をつけている。奈良時代に中国から請来された牀は，平を通じて用いられたものの，牀から床へと替わり，高さが低くなつたられる。床つまり寝台としてのトコは，天皇や皇后の御帳台としてのめ，他の皇族・貴族は浜床のない御帳を用い，これを「御帳」ミチョ及，時にはトコと呼んだ。

時代の寝殿造では，御帳の台の部分をハマユカ（浜床）と呼んだ。宮として制定された床子は，中国の榻を小型化したものと考えられる。

時代の東山殿の持堂仏である東求堂西面の腰掛状のものは，庭を眺めの「床」でトコと呼ばれ，これは坐床（腰掛）の意味で，床几に通じとされた［注 18］。また，床のしつらいのある間をさす言葉として，という言葉が使われた。畳を敷き詰めた床子は，宮廷で使われた坐具，涼み台（縁台）の原型ともいわれているが［注 19］，中国語は床子や商品台を意味し，微妙に異なる。縁台の形態は中国の榻と類似し構式の共通性もあり影響が考えられる。

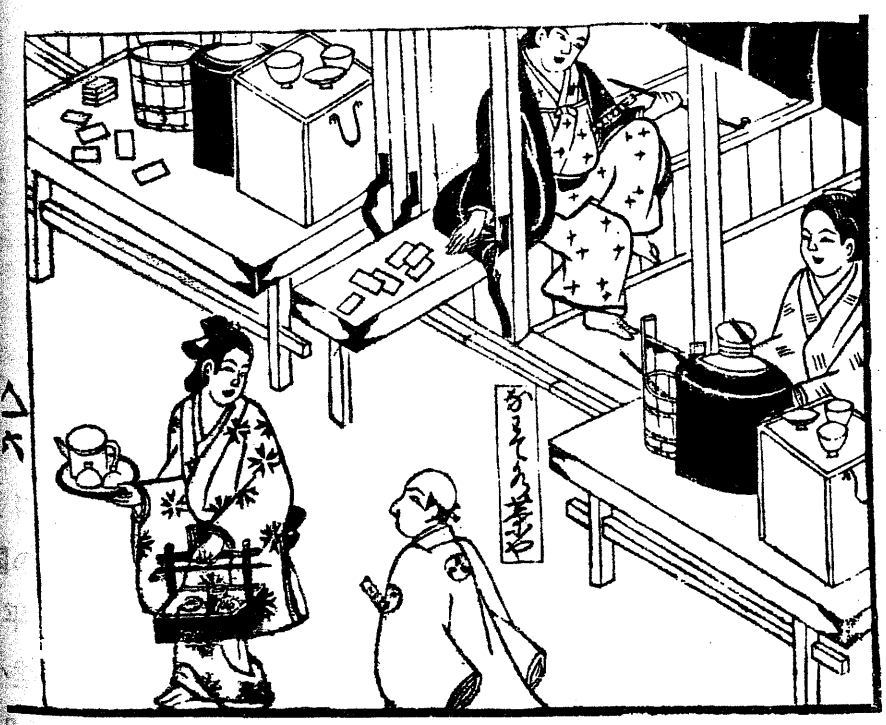
の「床几」は長方形の腰掛をさしているが，中国語では「床几」は寝掛を意味する。また，日本の「床几」は茶売りの台とも言われ［注 20］，揚げ棚として，江戸時代中期には庶民生活の中で使用された。

は固定形式と揚げ棚形式があり，ばったり床几ともいわれる（図 4-9）21］。固定形式の床几で，榻に似て独立したものは，中国の榻と長凳に起源を見ることができる。京都では，縁台は椽台と表記している。

時代に出版された『和漢三才図会』では，「牀はゆかやとこそしてチャuang は中国語）床は止古と読み，牀とは臥榻であり，座って身体をくせるもの」，とある。また，「榻とは狭くて長い牀である。我が国ではに牀を用いない。寝室は牀（由加）を高くし，上に畳席を敷くが，こ湿気を除く必要があるからである」，とある［注 22］（図 4-10）。

漢三才図会』第三十二家飾具における「胡床」は，胡や縄床そして摺どと名称表記がされている。しかし，中国の『三才図会』器用十二巻「折畳椅」が，『和漢三才図会』では摺畳椅と表記され，中国の「方椅」

名称表記が変容している。また，漢代では凳は「胡床」と呼ばれ，
椅子であった[注 23]。
漢三才図会』では，凳や胡床のことを将几（俗称：牀几）や綱床とし
称表記と形態の変容がみられる(図 4-11)。『和漢三才図会』に記載さ
る将几は，中国では胡床であり，明代では交杌と呼ばれ，現在では馬
杌と呼ばれるものであり，用途が類似するが名称が異なる。特に大き
がみられる。『三才図会』器用十二巻十八の榻が『和漢三才図会』では，
容して，牀と榻を同一形態のものとしている。また，『和漢三才図会』
十では，車駕類に「榻」をシジと読み，「榻は車の牀で狭くて長いもので
として，牛車の軛を支える台や乗降の踏台のことを指し，中国の榻と
る長凳を図示し，名称表記と用途の変容が見られる。



4-9　江戸時代前半期の店棚（ばったり床几）（『人倫訓蒙図彙』）

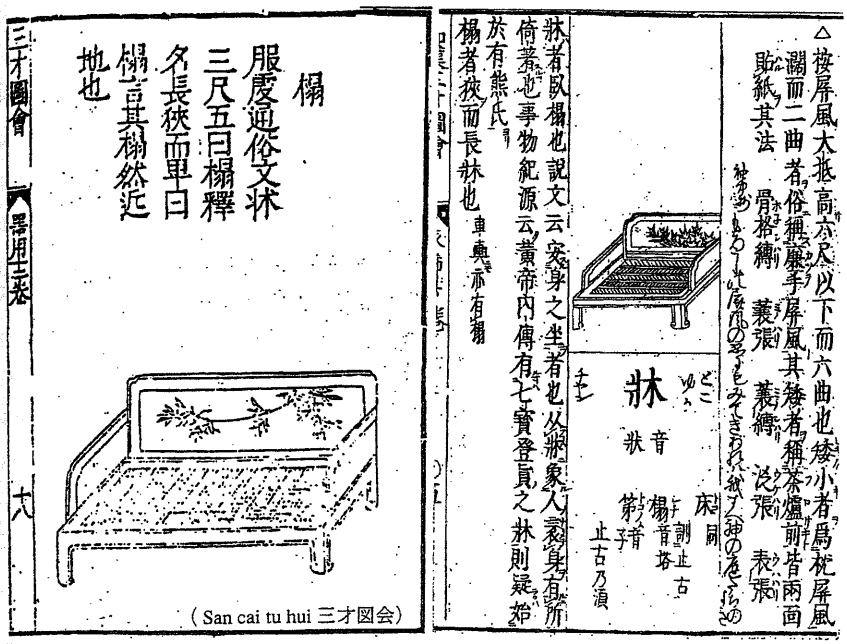


図 4-10.『三才図会』と『和漢三才図会』の榻と牀の比較

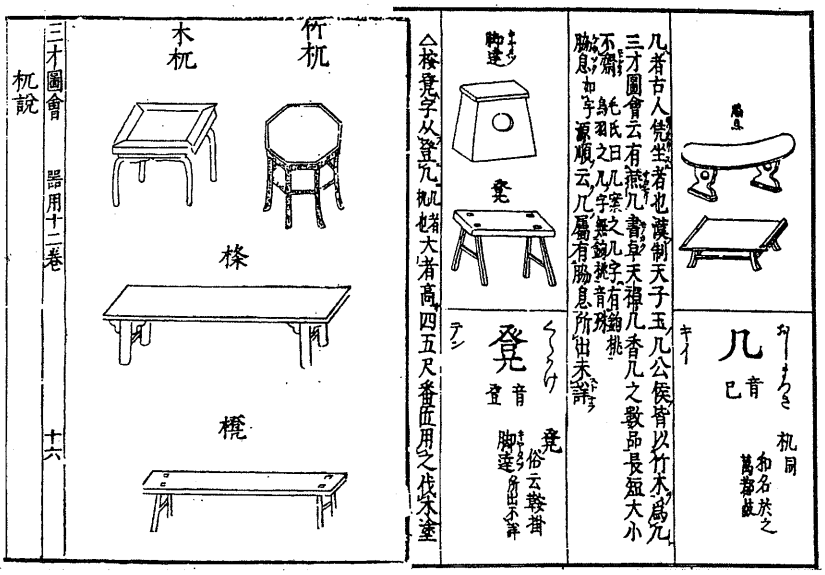


図 4-11.『三才図会』と『和漢三才図会』の凳の比較

4-1 に中国の床や榻の寸法，表 4-2 に日本の床や榻の寸法の比較表を示
国の床や榻は戦国時代の出土品が現存する。日本では正倉院の御床が
，平安時代の『延喜式』に大牀や大床子そして小床子や榻がみられる。
小型の寸法にバラツキが見られるが，中国と共通した表記がみられる。
4-12 は中国の榻と日本の榻足几を示す。几としているが案である。中国
（坐榻）には床脚間に眼象や香狭間の加飾があるものと直足榻があり，
は物を載せる台で，四本の脚と貫構造で脚には転びがある。

表 4-1　中国の床・榻の寸法比較,

牀(床)・榻の名称	主要寸法　単位 mm	時代	備　考
長台関戦国彩漆木床	床長（長）2180，寛（幅）1390，足高 190	戦国時代（BC 475～BC 221）年 戦国時代	図 1
包山2号戦国楚墓出土折畳床	床長 2208，寛 1356，通高 3840 欄高 148	晋時代（265～420）年	
大学北園晋墓出土の陶榻	床長 125，寛 100，高 280		
大学山七号晋墓出土の陶榻	床長 1120，寛 650，高 210	五代時代（907～960）年	御床と類似
江蔡庄五代墓出土木榻	床長 1800，寛 920，高 500		
江蔡庄五代墓出土木榻	床長 1880，寛 940，高 570	元朝末年 明朝初年（1270～1368）年	
《勘書図》木榻	床長 1800，寛 920，高 500 （枠は 45° 格角枠接）		
山西汾県出土明洗式時期木床	床長 1980，寛 820，框高 570，厚 70 欄柱高 250	明時代(1368～1644)年	
家具研究　楊耀　著　榻	床長 2040，寛 940，高 775（床高 520）		図 4
架子床	床長 2260，寛 1600，高 2420（床高 520）		図 4(ロ)
家具研究　王世襄　編著			図 4
有束腰直足榻	床長 2065,寛 802,高 464		
六足摺畳式榻	床長 2080,寛 1550,高 490		図 4(ニ)
三屏風独板囲羅漢牀	床長 2108,寛 112o,高 7560		図 4(ハ)
門囲子架子床	床長 2185,寛 1475,高 2310		
月洞式門罩架子床	牀面 2475，寛 1878，高 227,		図 4
抜歩床	牀面 2270，幅 2070，高 208		図 4(イ)
横辺装板囲子羅漢牀	床長 2000 寛 920,高 880	清時代(1644～1911)年	
螺鈿榻	床長 2000 ,寛 1200，高 950		
雲紋抜歩床	床高 2440 長 2080 長 2210		
床	床長 2170,寛 1395 高 2400		
床（大床） （大牀） （抜歩床）	床長 2290×寛 2175×高 2300		

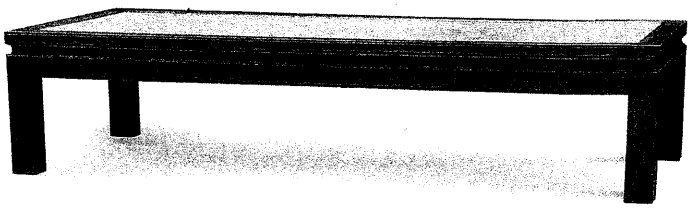
表 4-2　日本の床・榻の寸法比較

牀・榻の名称	主要寸法　mm	時代　　備考
正倉院		奈良時代
御床第 1 号	框縦 1190，幅 2370，全高 385，厚 70	（710～759 年
御床第 2 号	框縦 1190，幅 2370，全高 385,	ヒノキ材の長方形四脚付き床，床上面はこ簀子状で御床二張が一具として使用された。
延喜式巻第三十四，木工寮		平安時代 （764～1185）年
牀	長 1212，幅 1212 高 909	
大牀	長 3606，幅 1212，高 909	
牀	長 2424，幅 1515，高 393，厚 7	
牀	長 1818，幅 1212，高 30，厚 72	
牀	長 1212，幅 1212	
大床子	長 1363，幅 727，高 30	
小床子	長 60．6，幅 454，高 3939	
喜式巻第十七，内匠寮，		
榻	長 1605，幅 757，高 242	

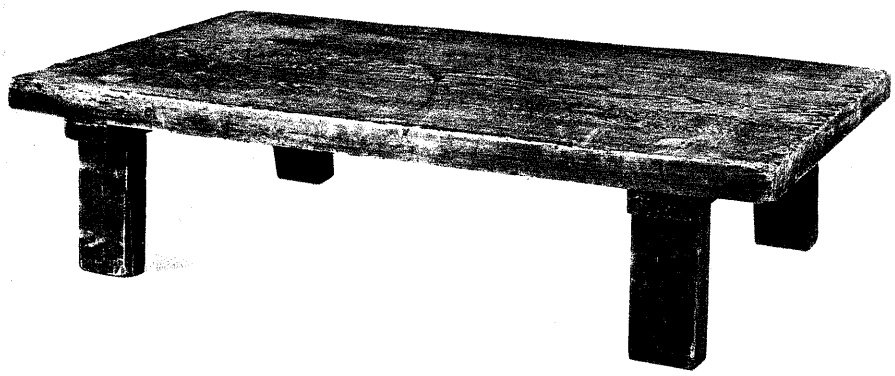
山东英山隋徐敏行墓壁画上的榻

中国 山東嘉祥英山徐敏行の隋代墓壁画上の榻

(李徳喜 他著『中国古典家具』)



中国・直足榻 (『明式家具研究』)



榻足几 (『正倉院の木工』)

図 4-12. 中国の榻と日本の榻足案の比較

(1) 日本の床子・床几・縁台

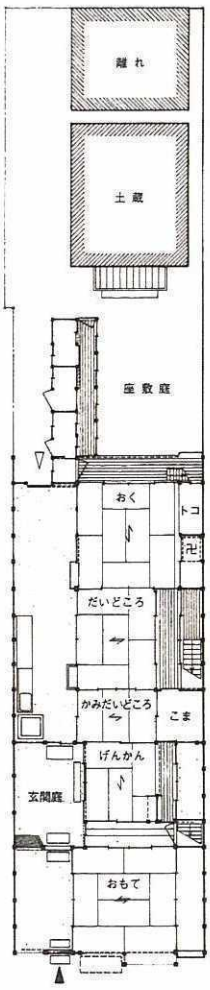
は『延喜式』に大床子や小床子がみられ［注 24］，中国の榻を受け入
具である。縁台は室町時代の濡縁（簀子）や置縁などを起源とし，江
初期には竹製や木製の涼み台と置縁が一般民家でも使われるようにな
江戸時代の縁台は京都や大阪では床几とも呼ばれている。縁台の形態
の榻と類似しており，その様式の影響も考えられる。日本の「床几」
形の腰掛をさしているが，『古事記』では「呉床」となっている。呉国
ち中国では，「床几」は寝台と腰掛で，「呉床」とは「腰掛」と考えら

，日本では「床几」は茶売りの台であり，店棚や揚げ棚として江戸時
期には庶民生活の中にとけこんでいた。店棚には固定形式と揚げ棚形式
，ばったり床几ともいわれる(図 4-13) ［注 25］。独立したものは，い
も縁台の形状をしている。ここに中国の榻と長凳が，日本の縁台と長椅
受容された形態を見ることができる。つまり，中国の榻と日本の縁台に
通性が見られ，縁台は家具であり，中国の榻である可能性がある。
国で高度な工芸技術で作られた五代（907-960 年）の木榻の実物が出土
南方地方（長江の南方）の榻の構造形態や接合・加工技術を示すものと
報告されている。この榻は，中国家具史の中で重要な意味を持つものと
いる［注 26］。この「木榻」と共通すると考えられるのが，正倉院に
御床」である。構造形態や接合技術において類似するところが多いの
詳細は資料編に示す。(第 1 資料編 2.3.1.-2.3.2.)
本の縁台は，関東地方では縁台や床几と呼ばれ，関西地方では床几（ば
り床几）とも呼ばれている。
国の榻と御床そして縁台や床几には，構造形態に共通する部分があり，
の榻を受け入れたものと考察される。それは『和漢三才図会』の牀と『三
会』の同一形態の「榻」が，変容した表記で受容されていることからも
る。
牀」は寝台であり，「榻」は坐臥具で，床几」は寝台と腰掛を指す表記で
形態や機能そして表記が異なるものが，同一のものとされているとこ
日本での変容過程を見ることができる。

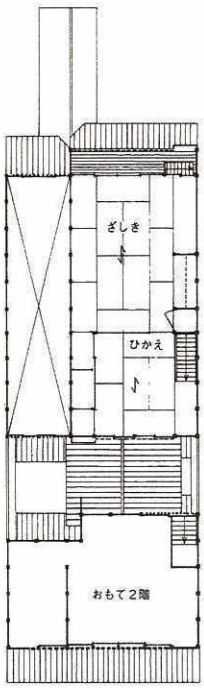
外観

(川北家住宅，鉾町)

幅 720,長さ 1670,高さ 430



配置兼
主屋１階平面図



主屋２階平面図

図 4-13　京都町屋に見られる床几・揚げ棚（著者撮影 2004 年）

4.3.3(2)　日本の縁台・床几の形態

江戸初期には竹製の床几（縁台）が使用されていることを浮世絵に見ることができる（図 4-13）。中国の竹床は日本との関係が深いと思われるのでこの章で取り上げる（図 4-14）。

京都の株式会社御池での聞き取り調査では，竹の縁台の寸法は大型で幅 365mm×長手 1350mm×高さ 454mm あり，小型で幅 365mm×長手 1000mm×高さ 454mm で，大小二種類の縁台がある（図 4-14）。竹でない縁台として浮世絵に見られる縁台(図 4-13②)は，鈴木春信の「お仙の猫じゃらし」で，江戸初期の 1765-1770 年の作である。幅三尺×長手六尺×高さ 1 尺三寸の縁台と見られる。縁台の上には畳表が敷いてあり，煙草盆が置かれている。(図 4-15③)の一筆斎文調の「三囲稲荷社の役者奉納絵馬を見る男」は 1769 年作で，幅二尺×長手六尺×高さ一尺三寸ぐらいの細長い縁台である。この二つの形態が一般的な寸法で，寺院（薬師寺金堂）にある縁台は幅 955mm×長手 187mm5×高さ 485mm の縁台で寺院用縁台の寸法は大型である。京都の町屋の店棚（ばったり床几）の寸法は幅 600mm×長手 1920mm×高さ 350mm で小幅であるが，店の茶売りの台「縁台」は幅 725mm×長手 1850mm×高さ 400mm で小幅である。

（京都・株式会社御池）

歌川豊広：1789-1801

納涼二美人図

図 4-14　竹の縁台「晒竹椽台」と浮世絵に見る江戸初期の竹製の床几（椽台）

竹床(竹長椅子)

中国の竹床（竹長椅子）（間口 1860, 奥行き 670, 座高 350, 貴州省麻江県）

図4-15　中国の竹床（竹長椅子）（間口 1830mm, 奥行き 730mm, 高さ 400mm）
（中国江西省進賢県，国立民族博物館蔵）

清広：見立玄宗・楊貴妃

1764(宝暦年間)

②鈴木晴信：お仙の猫じゃらし（1765-1770）

幅三尺，長手六尺，高さ一尺三寸の縁台

斎文調：三囲稲荷社の役者奉納絵馬

る男，1769(明和六)年，幅二尺の縁台

④鳥居清長：大川端夕涼

1764-1772(明和年間)

（原色浮世絵大百科事典，浮世絵全集，原色日本の美術）

図 4-16　江戸時代の浮世絵に見られる縁台

の起源と類型

中国の凳

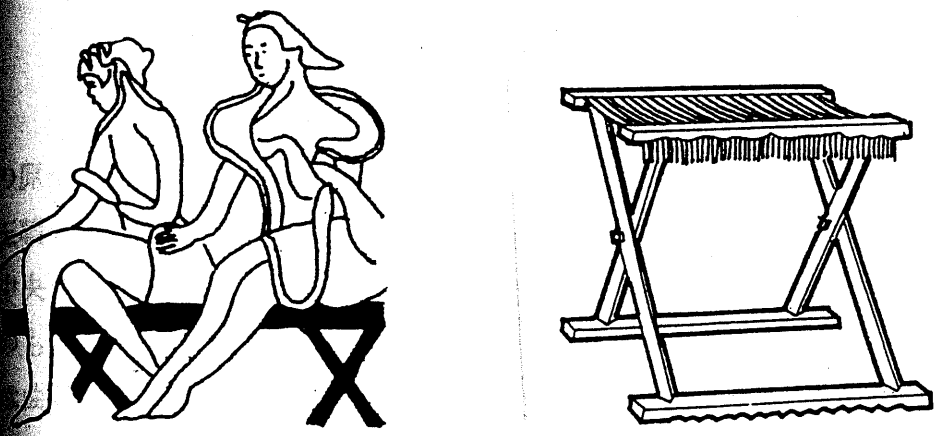
(櫈とも書く）一般的に凳子と言われる坐具で，床坐と椅子坐の中間
するものである。漢代には凳子と言う名称はなく胡床と呼ばれ，唐代に
や杌凳とも呼ばれ，交杌とも呼ばれていた[注 27]（図 4-17)。この小凳
流は，漢代の脚凳（脚榻，榻凳）といわれ，床に登るための踏み台（脚
具に転用したとする説がある[注28]。胡床は折り畳み椅子のことで，
中国古代に北方の騎馬民族および西方の異民族を称した）から伝来し
胡床と呼ばれた。

代には交床，唐時代以降は繩床，宋時代から交椅や太師椅とも呼ばれ，
机や馬閘と称されているものである。唐時代には凳の様式が多く，形
り方凳や長条凳（板凳）そして座墩（細腰凳，月牙凳）などの種類が
長椅子である板凳は，宋画『清明上河図』に一卓二凳の形式が見ら
図 4-18)。この卓と凳は素朴で飾りが見られず，脚に四方転びの高度
がある。

調査の対象としたのは，一般に小凳子と呼ばれる，一人用の低い背持
ない腰掛けである。この坐具は方凳や長凳（板凳）を低く小さくした
ある。小凳子は，国の都市や農村で，古代から現在まで継続され使い
れている腰掛けで，移動性や融通性があり，凳子の材料には，木や石
草と竹そして藤や陶磁が使用され，製作しやすく多様な材料で作られ
う特徴を持っている。しかし，あまりにも一般的すぎて史料や文献そ
画には登場することが少なく，その実態が掴みにくいのが現状である。
子の起源は脚凳ともいわれ，東晋時代には曲足案とも呼ばれ，踏段や
の機能がある（前掲図 4-3)。小凳子は，『三礼図』[注 28]に見られる
の木板式や四足俎に形状は類似する。中国の「俎」の起源は商や周時
り，肉を置いて切る道具，物を置いて神と先祖を祭る礼俎，寺院の祭
あった。また，身分と地位を表す礼器でもあった。礼器（礼俎）には
石俎そして木俎がある。図 4-20 に俎の種類と形式を示す。

では「まないた」（砧板）を椀俎や椀と略称し，俎は几や案など中国家
本的雛形，つまり家具様式の原型といえる[注 29]。中国語では，俎案
器や俎豆である。日本語では「俎板，俎」と，史料に異体字が見られ

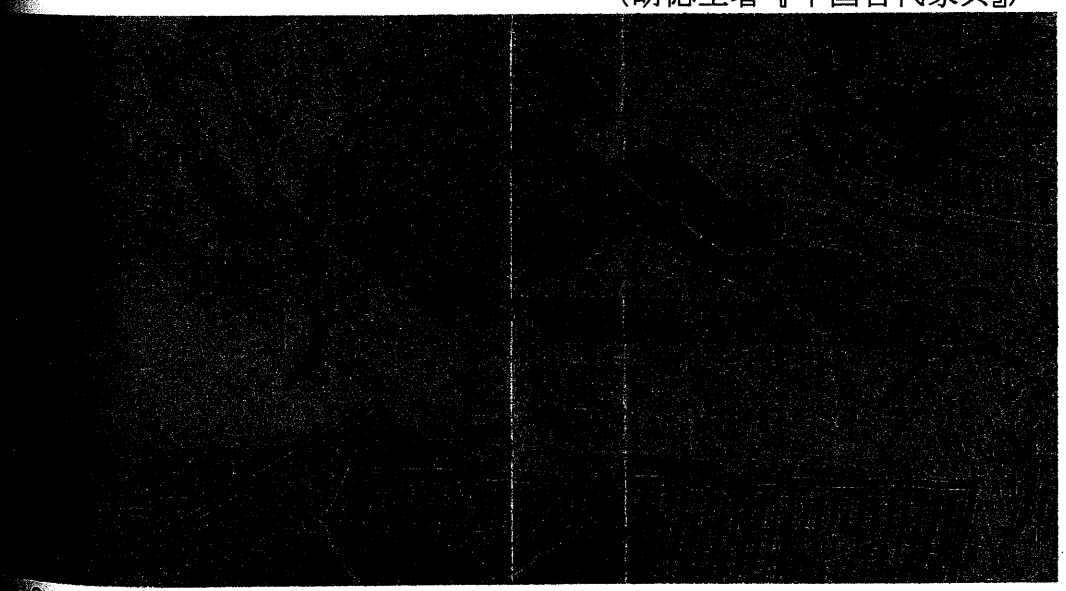
は胡人（西域）から東漢末に導入された。後漢の霊帝は胡床や胡服そ
飯などを好み，宮廷で使用したのでこの名前がある[注 30]。
代には交床，唐時代以降は交床などと呼ばれた。現在は馬扎・馬閘と
るものである。凳（腰掛）の起源は漢末であり，細腰凳として唐代ま
され，唐代には 4～5 人坐ることができる長凳が多くなり，五代は圓凳，
は方凳や板凳となり，明代の凳子は，杌子や杌凳とも呼ばれた[注 31]。
代に出現した胡床は，隋朝時代には交床へと変化し，唐代から背板が
れて，宋代には交椅や圈椅へと変化した椅子と，交杌から現代の馬札
化した折り畳み腰掛にわかれる。



敦煌 257　壁窟画

4-17　**中国南北朝時代の胡床**（別名は交杌，現在は馬閘や馬扎）

（胡徳生著『中国古代家具』）



18　**宋画「清明上河図」に見られる板凳と卓**（宋張澤端清明上河図）

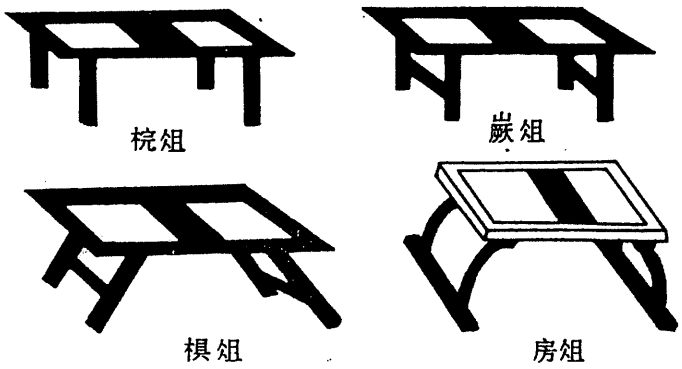


図 4-19　三礼図における夏・商・周時代の俎の類型
（李徳喜『中国古典家具』）

の原形といわれる『三礼図』図 4-19 の梡は，周代（B. C. 11 世紀-B. C. 771）
王朝の俎で四足がある。嶡は夏（B. C. 21 世紀-B. C. 18 世紀）の俎で，四
中央に貫を施したものである。椇とは殷（古代王朝で実在が証明される
のもので，商ともいう）の俎で，椇俎とは足が斜めになった俎である。
は曲足で跗（畳摺や地摺り）のある俎のことである。
4-21 は春秋～漢時代出土下明器の俎の形状を示すものである。

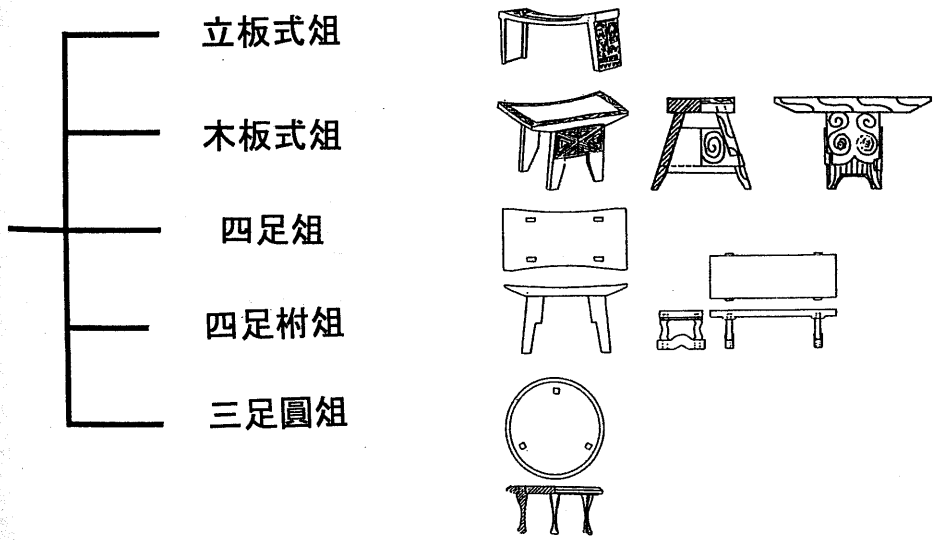
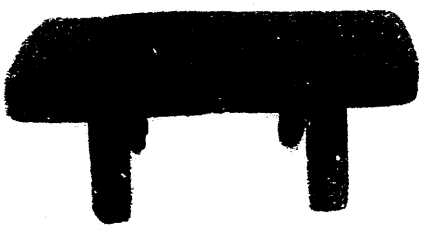
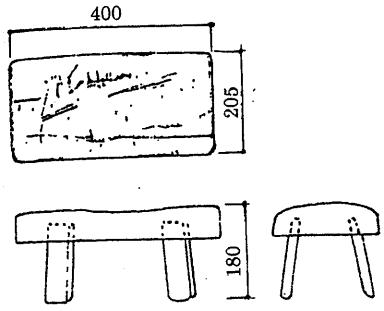
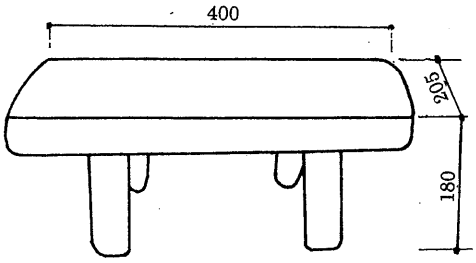


図 4-20　俎の種類と形式（小凳子の原型）
（李徳喜『中国古典家具』から作成）

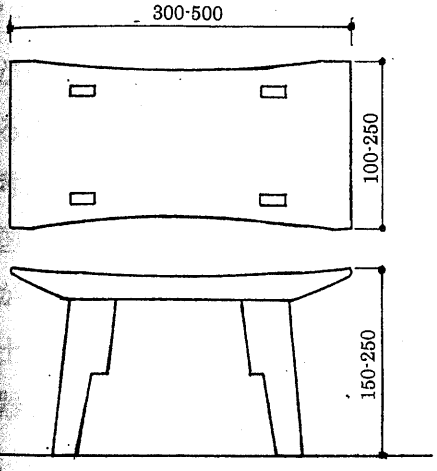




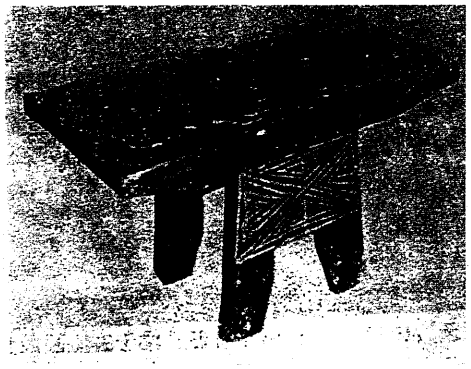
文物、1980年、第1期、38-39



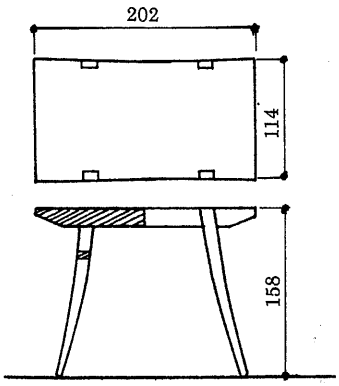
山東省金雀山西漢墓出土木四足俎



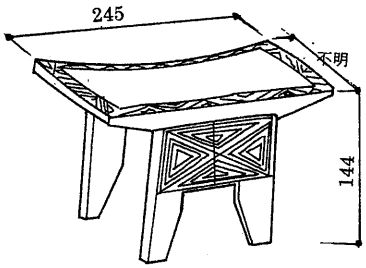
省超家湖春秋墓出土木四足俎（25個の寸法）



河南省信陽長台関戦国墓出土木板式俎・漆俎



湖北省雨台山戦国墓出土木四足俎



河南省信陽長台関戦国墓出土木板式俎・漆俎

図 4-21　春秋・戦国・漢時代の木俎の形状と寸法

（李徳喜『中国古典家具』より作成）

日本の俎と凳

和漢三才図会』巻三十一庖廚具によると，日本のまないたは「木砧」で砧とは魚板である」とある(図 4-22)。『和名抄』[注 32]の廚膳具に「俎魯の具としているのは間違いである。俎は，祭器（机の一種）で，形はるが用い方は異なっている」とある。俎は祭祀用の案几で，木砧は食る敷き板，あて板と，区別されている。

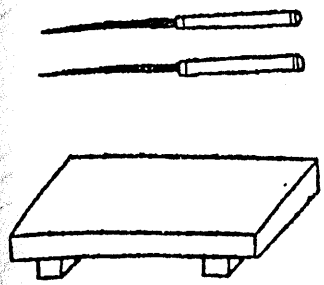
岡県の伊場遺跡で，木製の俎が二個出土している。1 つは平安前期の長さ×幅 260mm×厚さ 50mm の下に四脚で転びがあり，高さ 280mm である。他長さ 431m×幅 114mm×高さ 130mm で二脚である[注 33]。

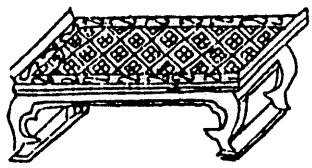
和漢三才図会』の神祭具の中には俎豆（そとう）とある(図 4-23)。俎と塗りの筆返しの付いた台（案）を指し示している。これは，(図 4-19，図『三礼図』[注 34]と，天板や脚そして畳摺りが共通しており，漆塗りの が付く案で，唐画「六尊者像」の中の脚案とも同形状であるが，寸法る。この俎は，寺院の仏堂内において使用される，前机や経机と同一と考えられる（図 4-24)。

国立文化財研究所編『木器集成図集』によると，日本の腰掛は，刳物物があり，弥生時代中，後期に出土している。腰掛状のものは，登呂遺出土した弥生時代後期の木器である。脚は両脚組立式の杉で作られ，腰器といわれる。座面が 10mm ほどえぐられており，食物を乗せるための，用いられたものと推測される（図 4-25）[注 35]。

腰掛は『人倫訓蒙図彙』風呂屋の女図や式亭三馬著『浮世風呂』[注おいて図 4-26 に示す小桶が腰掛であり，『古事類苑』の澡浴具にも風呂ないので，使用されたのは現代になってからと推測される。

院には物を載せる台机として榻足几が残されている。中国の長凳や板類似したものが『和漢三才図会』の車駕類に榻（シジ）として図示され，は車の牀で，狭くて長いものである」とある。つまり，榻は牛車に乗る踏台や馬鞍とされている(図 4-27)。平安時代の『法然上人絵伝』には坐す牛飼いの姿がみられる（図 4-28)。『春日権現霊験記』では「胡床」るが，これは明らかに中国古典家具の小凳子であり，鎌倉時代末期には胡床）が存在していたことが立証される。また，『人倫訓蒙図彙』の材木図中に，腰掛に座して本を読む姿が図示されており，江戸時代にも小凳腰掛として存在したことになるが名称は不明である(図 4-29) [注 37]。





22　『和漢三才図会』の木砧（まないた）　図 4-23　神祭における俎豆

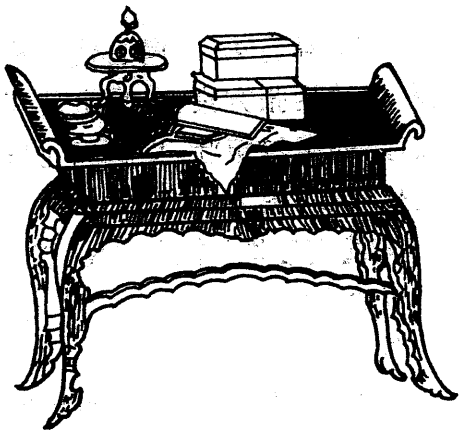
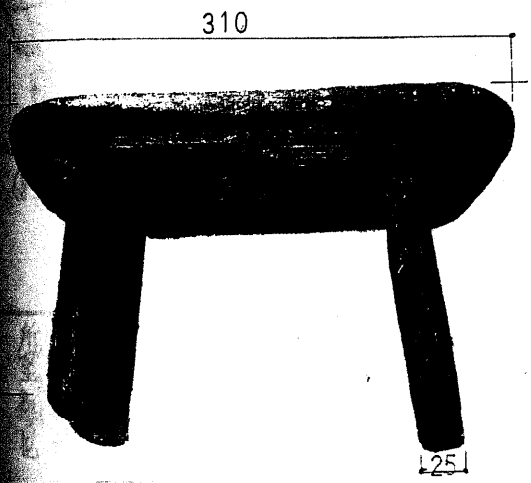
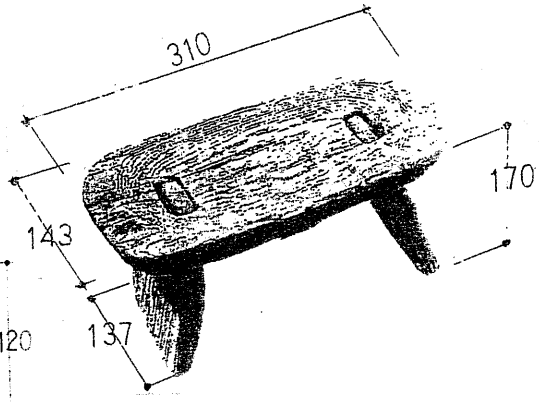


図 4-24　唐画『六尊者像』の撤脚案





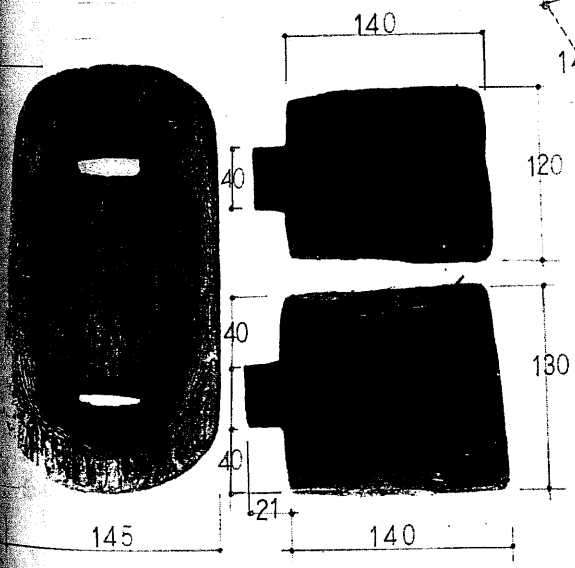
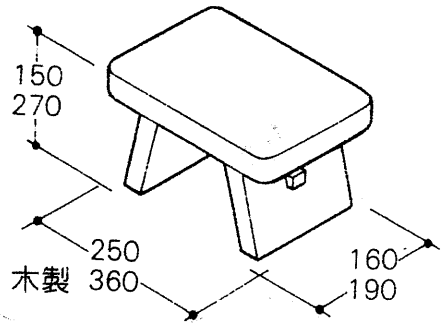


図 4-25　登呂遺跡出土の弥生時代後期の腰掛け状木器（組立式）

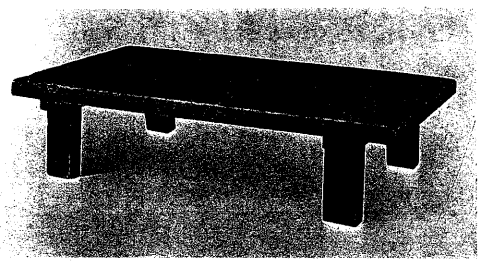
（静岡市登呂博物館蔵）

ハ 風呂場『雄長老寿話』17908(寛政 2)年

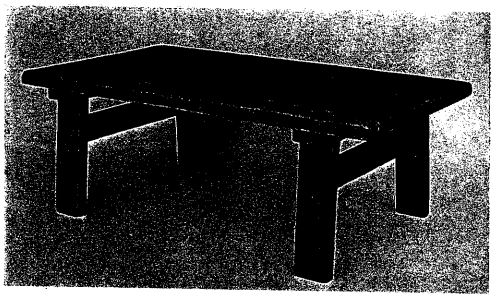


(『人論訓蒙図彙』風呂屋の女図)：ロ (『建築設計資料集成・住居』)

図 4-26　風呂屋の小桶と浴用腰掛



1038mm×567mm×高 247mm 用材：スギ



920mm×525mm×高 327 用材：ヒノキ

図 4-27　『和漢三才図会』車駕類の榻(シジ)と正倉院蔵の榻足几

(イ)　　(ロ)

図4-28　『法然上人絵伝』や『春日権現霊験記』の胡床（小発子）

-28の鎌倉時代の法然上人絵伝では，外で椅子座に近い腰掛に坐る様子れる。脚間に眼象（格狭間）がみられ，漆塗りの装飾が見られる。図示す鎌倉時代後期の『春日権現験期絵』では，拝台（木）に座る，春神に別離の社参をした興福寺の壱和僧都が画かれている。拝木とは腰尻懸木とも書かれ，寺や神社の社殿の前で腰をかけて参拝するための（板発や条発）である。座るという坐文化は存在していた。

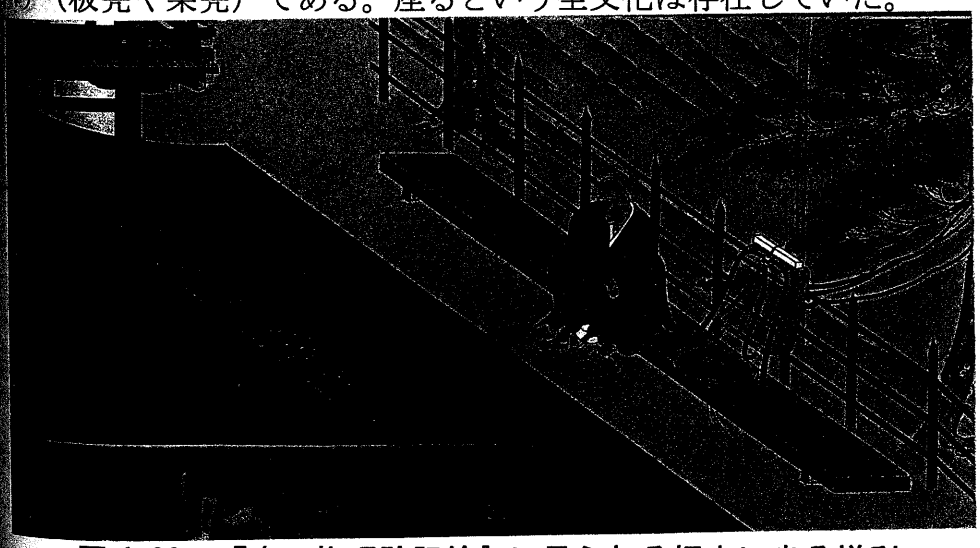


図4-29　『春日権現験記絵』に見られる拝木に坐る増利

4.5 中国農村部における低い腰掛である凳子の調査

4.5.1 雷山県郎徳鎮郎徳上寨の調査概要

この調査の目的は，中国農村部で使用されている低い腰掛の凳子と生活文化のかかわりについて，用法や機能性を検証することにある。

この調査は，財団法人住宅総合研究財団の研究助成を受けた共同研究の一部である[注 38]。

調査したのは，貴州省の東南部で，雷山県と凱里市との県境地区にある，ミャオ族の村で，河を隔てて上寨と下寨にわかれている。山の傾斜面に立地する上寨の上郎徳村は，約 600 年の歴史を持つ集落である。

村中の家は高床式住居で，切妻型の二階建木造家屋で，「吊脚楼」と呼ばれる形式が多い。全家屋とも板壁となっている。各家には，美人椅という二階の窓際（欄干）に坐る坐具（坐凳）が取り付けられている。坐凳と欄干が一体化したもので，休憩の場所である。欄干の格子の意匠は家により異なる(図 4-28) [注 39]。吊脚楼は住居の層と低層そして天頂（屋根）に分けられている。低層は生産の空間，中の住居層は生活（寝室と食事用）の空間で，天頂の間は倉庫である。住宅の柱はスギの木を使用し，すべて釘を使用しないで，榫（ほぞ）組の貫構造である。

4.5.2 郎徳上寨の陳継雄(宅)

陳継雄（29 才）宅では小凳子と板凳が生産されている。小さい腰掛けである小凳子は，木工具と電動機械（ボール盤）で量産され，販売されているので，村の標準的な形態の腰掛と思われる表 4-3，(図 4-30)。材料はこの村で産出する楓樹（カエデ）を使用し，ワニス仕上げである(図 4-31) [注 40]。

図 4-26　高床式住居二階の窓際（欄干）の美人椅(靠)

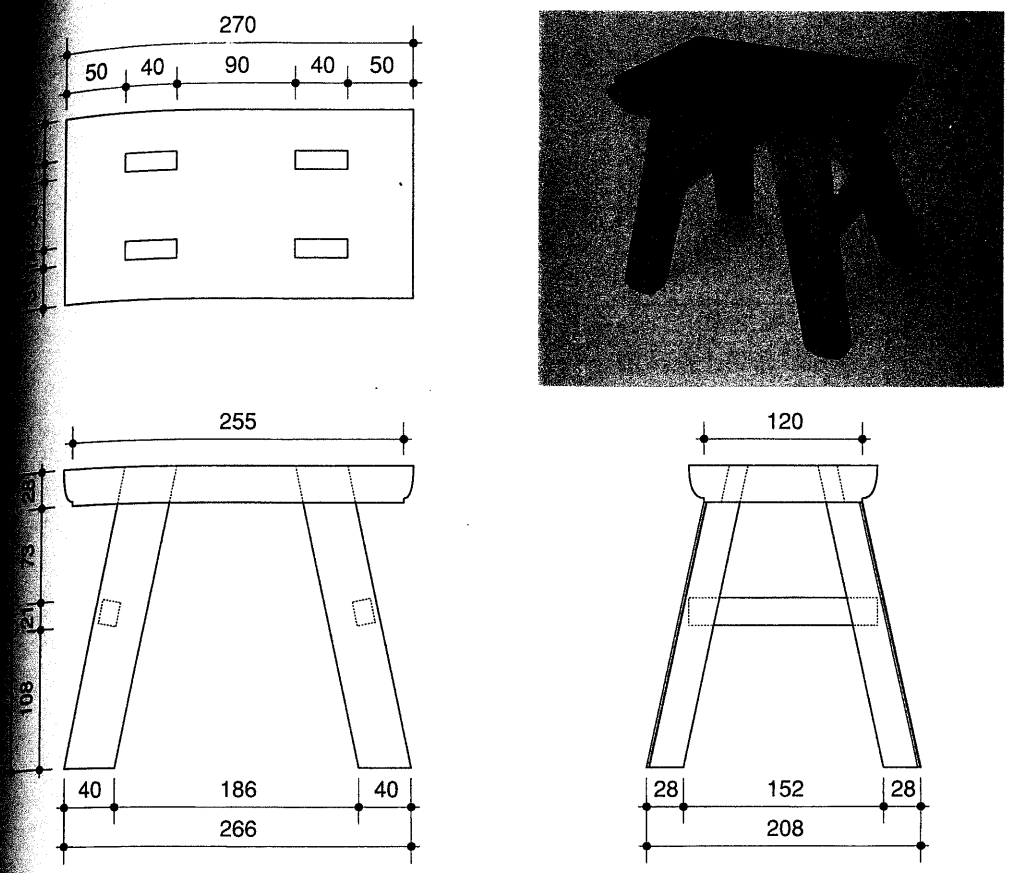


図 4-31　陳継雄宅で製作されている小凳子の三図面　材料：風香樹

（著者蔵）

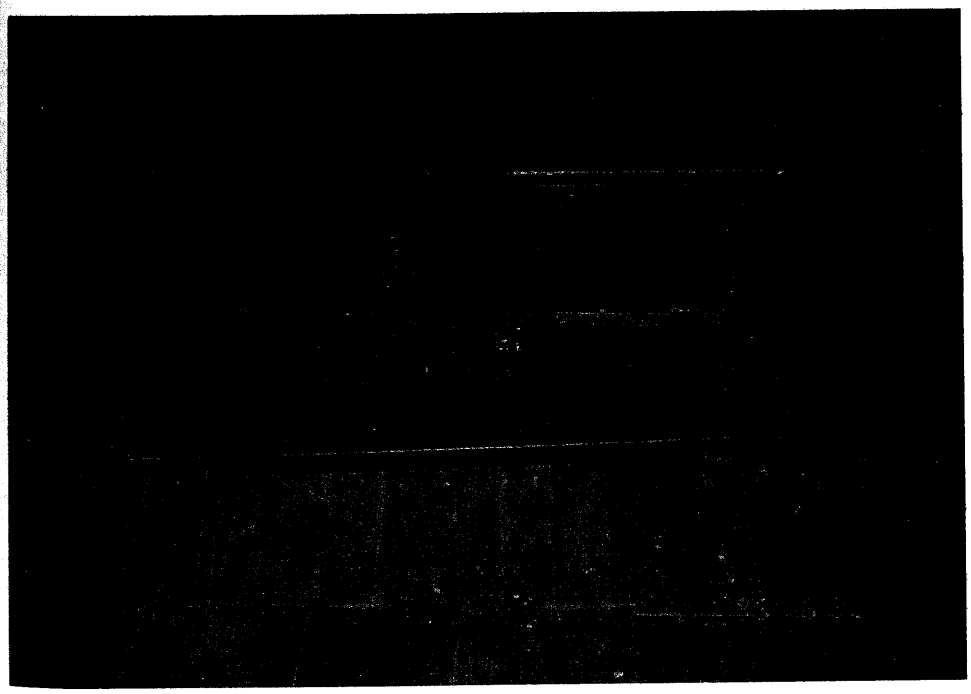


図 4-32　陳継雄（宅）で使用されている小凳子と板凳

表 4-3　貴州省で実測した凳の類型別寸法

単位：mm

分類	間口・奥行	高さ	数量	所在地
小凳子	270・145	230		雷山県上郎徳鎮
小凳子	430・145	495		上寨村
板　凳	895・145	270		陳継雄 宅
小凳子	235・110	240	1	凱里市舟鶏鎮
小凳子	240・140	180	2	石青村
小凳子	280・140	200	1	楊正平 宅
小凳子	280・130	195	1	
小凳子	340・150	310	1	
小凳子	340・155	325	1	
小凳子	420・140	355	1	
小靠椅	320・260	290	4	（座高さ 290）
小凳子	260・130	240	8	凱里市舟鶏鎮
小凳子	400・150	300	4	新龍村下新龍
小凳子	405・160	255	5	楊貞文宅(55 歳) 家族 6 人
小凳子	325・115	235	6	凱里市舟鶏鎮
小凳子	325・145	290	7	羅家寨村
小凳子	375・165	370	1	羅以柱 宅
小凳子	280・145	200	1	凱里市舟鶏鎮
小凳子	280・150	160	1	新龍村下新龍 2
小凳子	280・130	195	1	
小凳子	340・150	310	6	
小凳子	340・160	260	1	
小凳子	420・125	355	1	
小凳子	170・145	230	5	凱里市舟鶏鎮
小凳子	255・115	235	4	岩頭村 宅
小凳子	270・128	270	6	
小凳子	340・128	320	6	
小凳子	270・130	235	6	
小凳子	400・145	470	1	（座高さ 330）
小靠椅	330・260	330	2	
小凳子	285・140	215	4	凱里市舟鶏鎮
小凳子	330・140	235	11	白獅村
小凳子	380・150	340	7	李家寨
小凳子	450・160	490	1	李治平 宅

単位：mm

4.5.3 凱里市舟鶏鎮石青村の揚正平（宅）

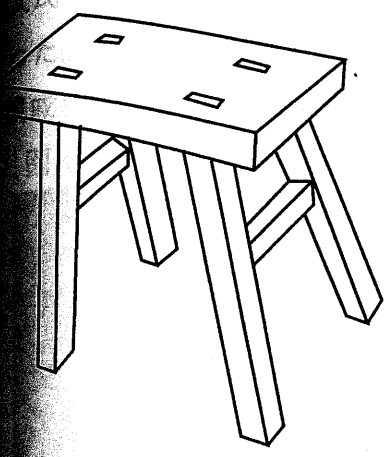
楊正平宅の小凳子は 11 脚使用されていたが，4 種類の腰掛けが使用されていた。背持たれのない凳子は，屋外では背持たれを壁面として座る方法がとられていた。楊正平宅において，葬儀後の半円直径 1050mm×高さ 180mmの半円形をした二つの半円卓を組み合わせた，中央にコンロ用の穴のある低い円卓と凳子に坐して会食をする光景をみることができた。円卓と腰掛は同じ高さであった。表 4-3，(図 4-33，図 4-34，図 4-35)[注 41]。

半円卓の寸法：半円直径 1050mm，高さ 180mm

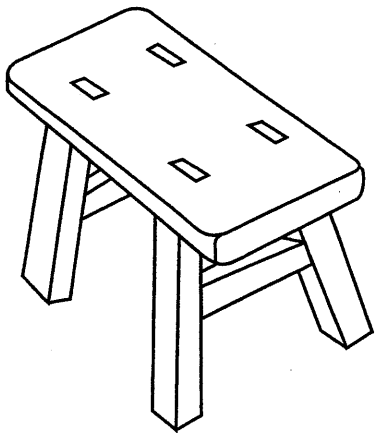
図 4-33　凱里市舟鶏鎮石青村（揚正平）宅の食事風景

図 4-34　凱里市舟鶏鎮石青村（揚正平）宅の小凳子

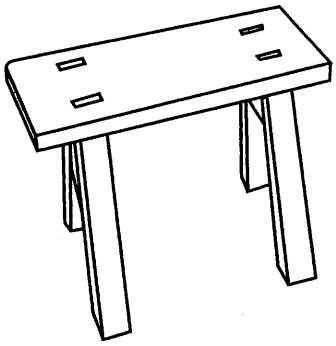
凱里市舟鶏鎮石青村（揚正平）宅の小凳子



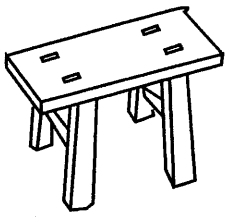
口 340×奥行 155×高 325



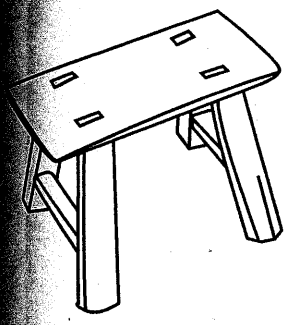
間口 280×奥行 130×高 195



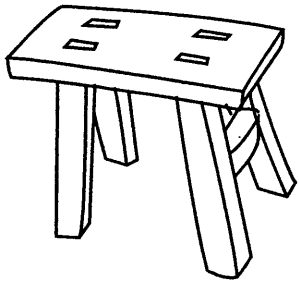
間口 340×奥行 150×高 310



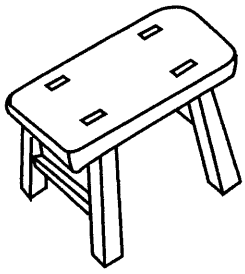
間口 240×奥行 140×高 180



280×奥行 140×高 200



間口 235×奥行 110×高 240



間口 240×奥行 140×高 180

図 4-35　凱里市舟鶏鎮石青村（揚正平）宅の小凳子のスケッチ

4.5.4 凱里市舟鶏鎮石青村の揚貞文（宅）

揚貞文氏 55 才（家族 6 人）宅には小凳子 17 個，靠背椅 4 個の計 21 個の椅子があった。これらの椅子は正月や子供の誕生日そして生まれて 1 ケ月の祝いに，親戚が集る儀式用としても使用する低い腰掛である（表 4-3，図 4-36，図 4-37，図 4-38）［注 42］［注 43］。

図 4-36　凱里市舟鶏鎮石青村の揚貞文（宅）

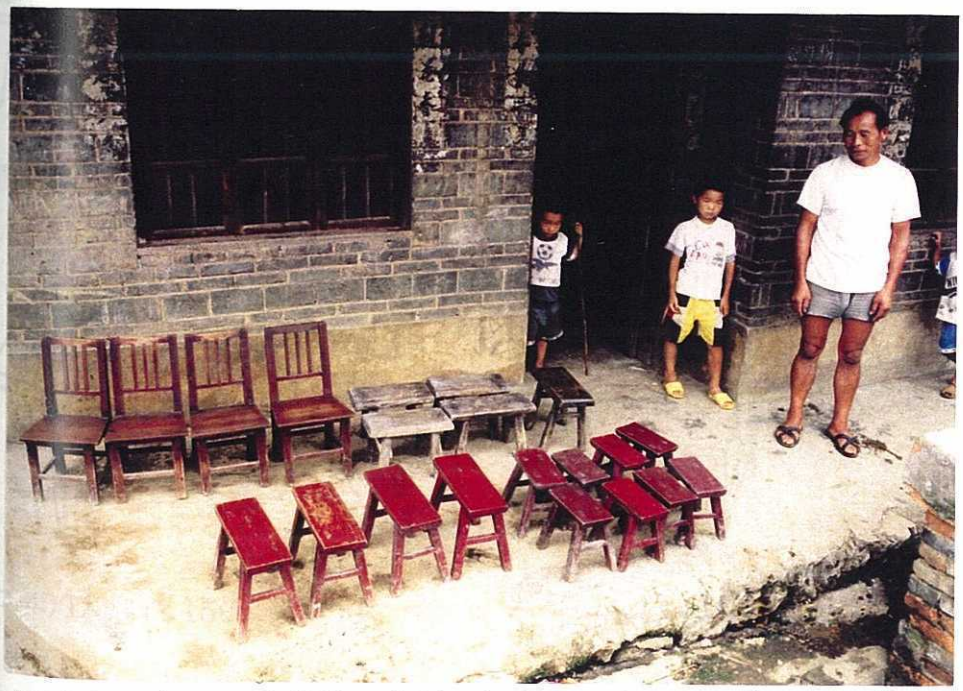
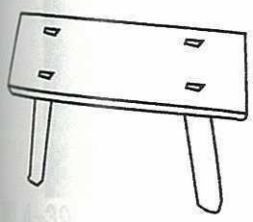
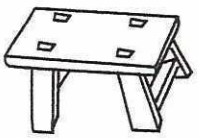


図 4-37　凱里市舟鶏鎮石青村の揚貞文（宅）の小凳子と小椅子

4.5.4.1　凱里市舟鶏鎮石青村の揚貞文（宅）

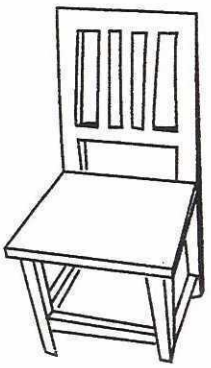


間口 405×奥行 160×高 255



間口 260×奥行 130×高 240

間口 400×奥行 150×高 300



間口×奥行 260×高 600,座高 290

図 4-36　凱里市舟鶏鎮石青村の揚貞文（宅）の小凳子と小椅子のスケッチ

4.5.5 凱里市舟鶏鎮羅家寨（羅以柱）宅

羅以柱氏 54 才は 4 人家族であるが，現在は 2 人で生活をしている。家は吊脚楼（高床二階建木造家屋）で，二階に美人椅（欄干）がある。この家には小凳子が 14 脚あった。我々はこの家で昼食を食べることができた。食卓は半円形の中に穴があり，2 つの台でコンロを挟んで，小凳子に坐して，コンロ上の鉄鍋の料理を食べた。この様式は楊正平宅の葬儀後の会食に使用されたものと同じであつたが，高さが低く，寸法は，幅が 150mm×高さ 150mmで直径が 1500mmであった（表 4-3），図 4-39［注 44］，図 4-40［注 45］，図 4-41［注 46］，図 4-42）［注 47］。

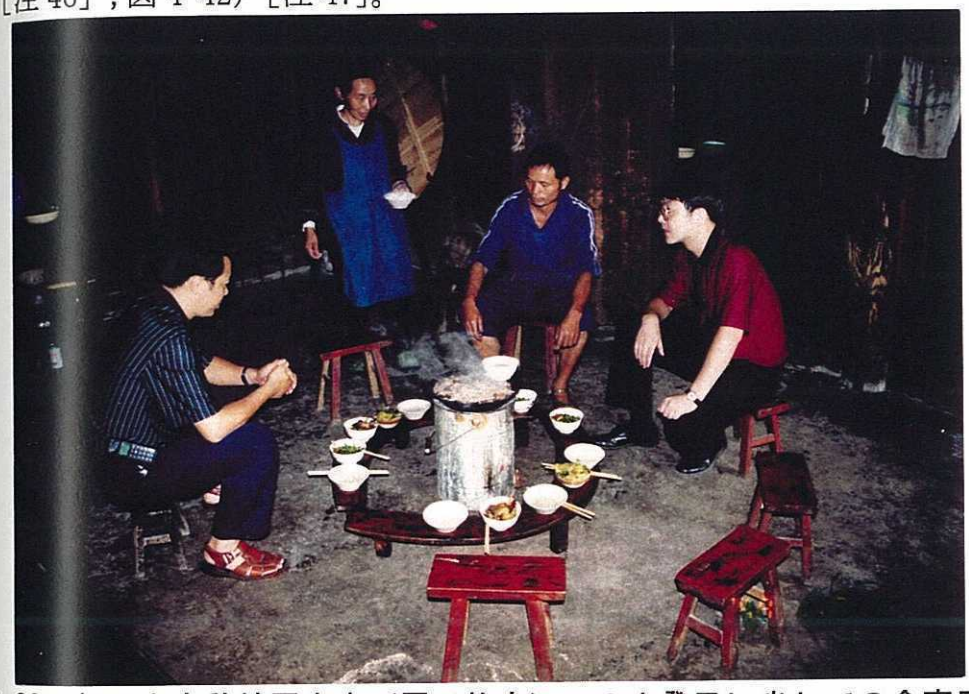


図 4-39　凱里市舟鶏鎮羅家寨（羅以柱宅）での小凳子に坐しての食事風景

円卓：間口 1020×奥行 130,150×高 150

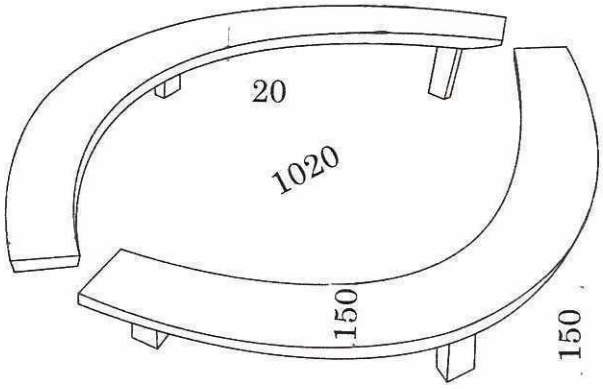
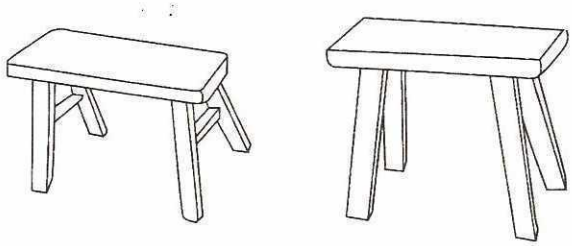


図 4-40　食卓用の半円形の中にコンロ用の穴がある円卓

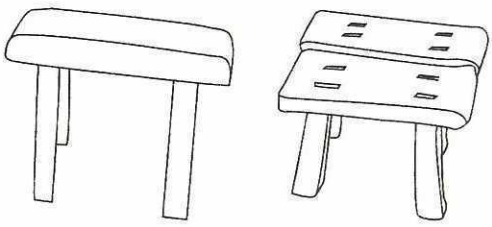
4.5.6 凱里市舟鶏鎮羅家寨（羅以柱）宅

羅以柱氏の自宅は4人家族であるが，現在は2人の生活でも小凳子が14脚あった。来客の接待用と思われるが，小凳子の生活が定着している。

図 4-41　凱里市舟鶏鎮羅家寨（羅以柱宅）での小凳子



羅以柱　間口 325×奥行 115×高 235　間口 375×奥行 165×高 370

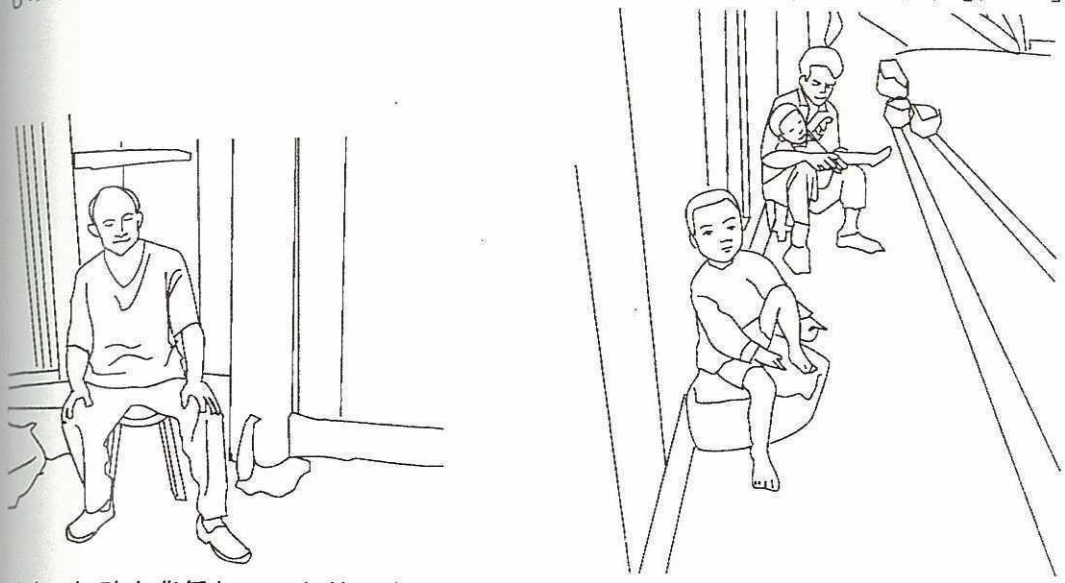


間口 325×奥行 145×高 290　間口 325×奥行 115×高 235

図 4-42　凱里市舟鶏鎮羅家寨（羅以柱宅）の小凳子のスケッチ

4.5.7 凱里市舟鶏鎮新龍村下新龍 2

氏名不明であるこの家では 13 脚の凳子があった。寸法は（表 4-3）の通りである。この村では，外壁に置いてある石に坐し，壁を背もたれにする光景をよく見かけた(図 4-41)。また，石にも坐る椅子文化の一つの形態をなすものとしてとらえた。図 4-42 に，この家の室内における凳子を示す[注 46]。



住宅の板壁を背凭れにした椅子坐　　住宅の板壁を背凭れにして石台に座る親子

図 4-39　石台に坐し，壁に凭れる坐の光景

図 4-40　凱里市舟鶏鎮新龍村 2

4.5.8 凱里市舟鶏鎮岩頭村（呉道成）宅

呉道成宅は，2 人で住んでいる，L 字形民居である。背持たれのある椅子の寸法は，間口 330mm×奥行き 260mm×高さ 675mmそして座高さ 330mmの小凳子が 2 脚，全部で 16 脚あった（表 4-3，図 4-45，図 4-46, 図 4-47）[注 49]［注 50］。

図 4-45　凱里市舟鶏鎮岩頭村の呉道成（宅）の赤く塗られた小凳子と小椅

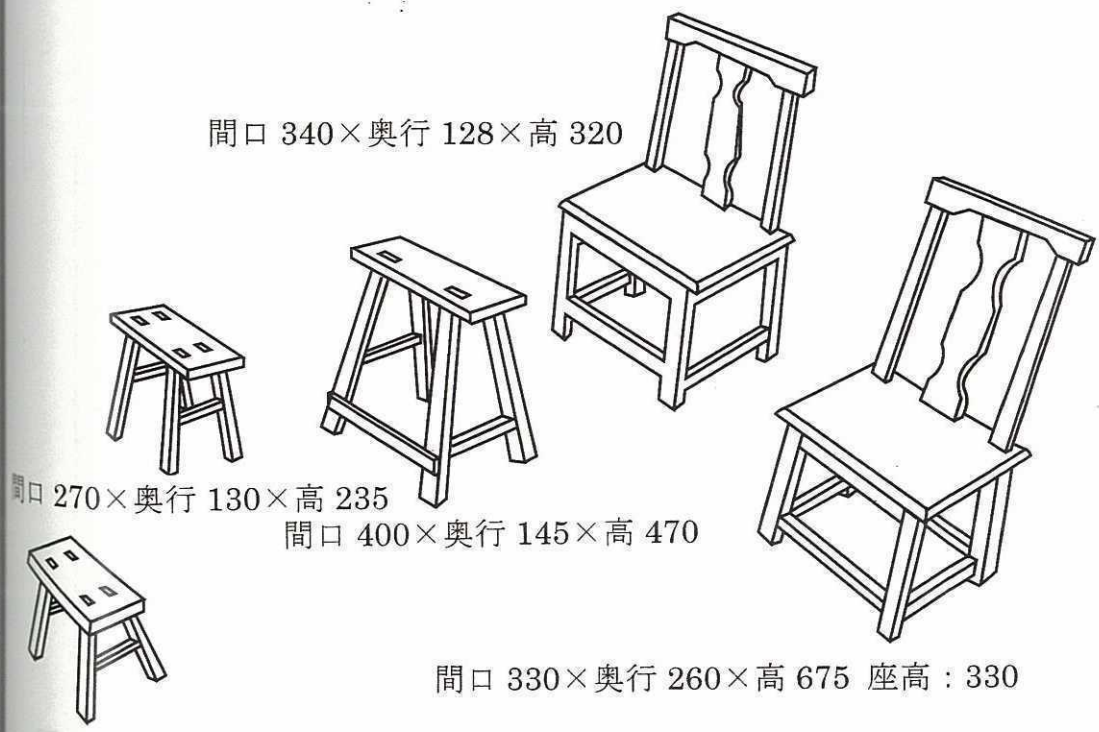
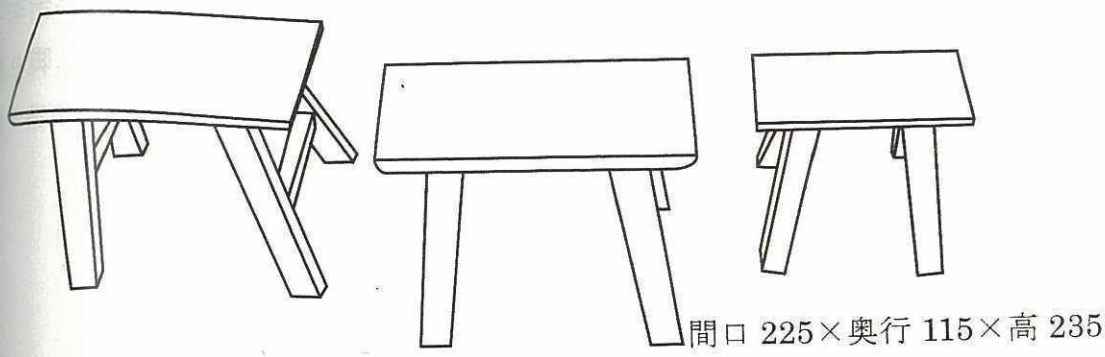


図 4-46　凱里市舟鶏鎮岩頭村の呉道成（宅）の小凳子のスケッチ

4.5.8.1　凱里市舟鶏鎮岩頭村（呉道成）宅



呉道成　間口×奥行 128×高 270　間口 340×奥行 128×高 270

図 4-47　凱里市舟鶏鎮岩頭村の呉道成（宅）の小凳子のスケッチと室内

4.5.9 凱里市舟鶏鎮李家寨（李冶平）宅

李冶平氏 32 才の家には，屋外に 2 種類 15 脚の小凳子があり，室内に 4 種類 9 脚，計 24 脚の小凳子があった。入口の右前にある丸い木製の樽状のものは，布を縮緬加工する道具である（表 4-3，図 4-48，図 4-49）［注 51］［注 52］。

図 4-48　凱里市舟鶏鎮白獅村李冶平宅の小凳子（屋外）

図 4-49　凱里市舟鶏鎮白獅村李冶平宅の小凳子（室内）

4.5.10. 陝西省漢中市均衡農村の凳子

法鎮龍家河村の３家族（氏名不明）11 名が住む農家である。この家では小椅子３脚，長凳子３種類 10 脚，小凳子４脚，方凳１脚の坐具を院子（庭）で使用していた（図 4-50）［注 53］。坐具として，伝統的な凳子や板凳そして小椅が使用された農村の典型的な坐の生活を示す好例である。

間口 1070×奥行 1135×高 375mm　　間口 352×奥行 282×高 455mm

間口 795×奥行 115×高 295mm

間口 765×奥行 105×高 255mm　　小椅子：間口 295×奥行 292×高 635 座高 280mm

間口 265×奥行 126×高 190mm　　間口 265×奥行 135×高 183mm

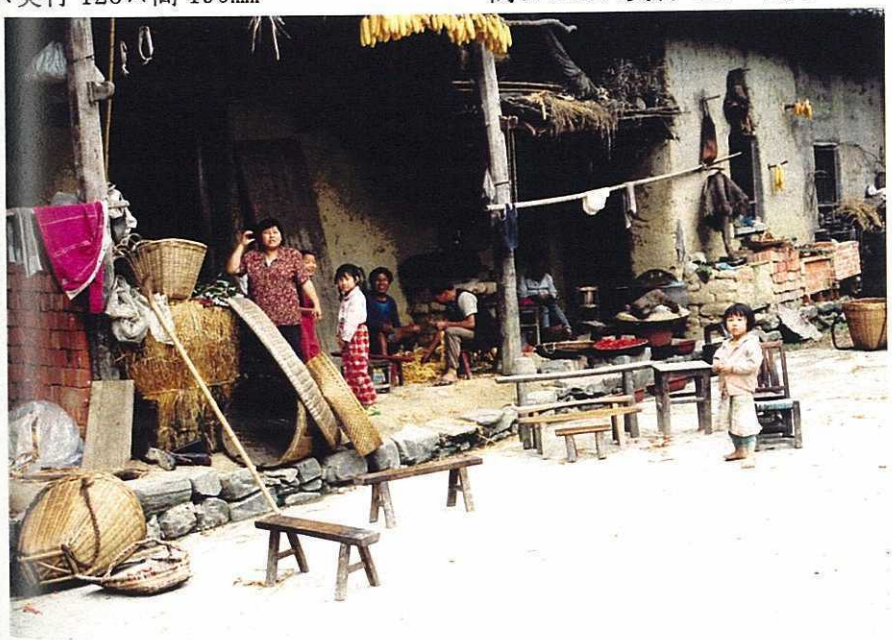


図 4-50　陝西省漢中市均衡農村の小凳子や板凳

4.5.11. 陝西省漢中市西俊城（マンション）における小凳子

このマンションは 1987 年に建築された。1990 年に入居した漢氏は，５階建ての３階に住む。３人家族で居間や台所そして食堂があり，面積は 80 平方メートルである。この近代的なマンションにおいて，近代的な食卓や椅子そして応接セットや寝台そしてテレビ収納飾り棚などのモダン家具と共に，六個の小凳子が使用されていた。中国の伝統的小凳子を使用した坐文化が，都市の高層集合住宅においても継続されている好例である。小凳子の寸法は長さ300mm×幅 155×高さ 240mm で緑色に塗られて近代的にされている（図 4-51）[注 54]。

4-5.11.1. 陝西省漢中市西俊城

小凳子
間口 270×奥行 200×高 270
間口 300×奥行 155×高 240
間口 255×奥行 150×高 225

図 4-51　高層集合住宅（マンション）にみえる小凳子

交椅と曲彔

『仏具大事典』『仏具事典』［注 55］［注 56］には，曲彔とは「曲録，曲木いう，肘掛け背板に曲線を多く用いているところからこの名があり，鎌代から使用され普及したもの」とある。

国では交椅や圈椅という。唐代中期以降に垂足坐で座る習慣が定着して，を皇帝や国王そして将軍と寺院の僧侶などが使用した。五代になると肘子（扶手椅）や座面に座る椅子（灯挂椅・靠背椅）など各種形態の椅子られる。

増弼著『太師椅考』［注 57］によると，交椅は宋代に出現した折り畳みの椅子で，初期のものは蓮葉形の木枕を笠木に付けていた。別名は太師いい，10 世紀から 13 世紀の宋朝で発展した。宋朝の交椅は直背交椅形搭脳）や曲背交椅（圈背交椅や円形搭脳）に分けられるが，搭脳（笠の形態により，さらに４分類される。また，交椅の変化したものとしてがある。凭几を榻の上に固定すれば，機能的にも形態的にも圈椅の起源る。凳と椅圈の結合で圈椅の形になることは，唐代と五代の『宮中行東や『執扇仕女図』に見られる［注 58］。その形状は半圓形である。

代の太師椅は圈椅である。圈椅と交椅の違いは，圈椅は枠組固定構造り，交椅は折り畳み構造であるという点で，明代の太師椅の俗称は羅圈いわれるものである［注 59］。

本の曲彔は中国の交椅の請来により影響を受けたことが明らかである。も，和製の曲彔は，笠木の太さや肘掛部分の曲線の流れ，背凭れの湾曲合など，中国の交椅と較べると曲線に洗練性がかけていると思われる。理由としては，用材と接合技術の要因が大きいと考えられる。つまり，の用材は，花梨や紫檀の硬木や，非硬木の欅木であり，その影響を受け禅宗では国産のケヤキで交椅を製作したが，椅圈の接合を楔丁榫による技術を使わず枘差しで加工され，簡易化されている。また寺院の曲彔は，的にヒノキやマツ材などの針葉樹に，漆塗りされたものが使用された。彔は寺院の僧侶が法事や地位を示すのに用いる中国の交椅と同じ機能で中国の交椅に比べると，座り心地そして安定性など，椅子としての機に欠け，禅宗様式の意匠性がみられるが，椅圈の蕨手の形状や部材の太違いが見られる。その要因は部材の接合と材質によるものと考えられる。国より請来した交椅は，現存するものは殆どなく，文化財として請来品

部保存されているだけである。和製のものは多く寺院用でのみ使用され，椅子文化に与えた影響は少ないと推測される。第１章 1.9 の日本に禅椅子に現存する交椅や圏椅そして縄床の調査結果を示した。

表 4-5. 中国と日本の坐臥具文化比較表

周、春秋	戦国	漢	三国	晋	南北	隋	唐	五代	宋	元	明	清	現代
席（坐具） 床（寝具）匡床 戦国彩漆木床 俎：肉切道具 礼俎（祭器）案 坐墩		床（坐臥具）　床と榻の大型化 榻（坐具）　坐榻 欹床　架床　長凳、条凳 榻登　凳子、杌子 凳子：雑技道具 胡床　禅床　交床　縄床（僧人用）						床榻（五人用）　架子床（寝台） 木榻　床榻　抜歩床　小屋類似 卓と凳　交椅　羅漢床（坐臥用） 脚凳　床凳　脚踏 条凳　春凳（杌子杌凳） 交椅：太師椅　交杌　交椅				床 炕 椅凳 俎板 脚踏 馬扎

縄文	弥生	古墳	大和	飛鳥	奈良	平　安	鎌倉	室町	江戸	現在
席　床はネドコではなく台床である。土間の上に置かれる起居のための床（寝台）である。 中国古典家具様式文化伝来 伊場遺跡：木製まないた（四本脚付き） 登呂遺跡：腰掛け（組立式）、兀子（調度）					御床　帳台（浜床）　寝室　床の間 榻足几　床子(坐床)　畳の床化　榻(腰掛)床 大床（簀子敷）置縁 榻：牛車の軛台、踏台 赤漆欅木　坐禅の床（大床）　店棚（揚げ店） 胡床　俎：切机、切盤　床坐化　茶店床几 交椅　床几				床 縁台 （竹、木） 店棚床几 まな板 俎(祭器)	床 畳 縁台 俎板 腰掛

椅子の名称変遷：東漢時代（縄床）→倚床（竹質倚床）→　唐代（倚子）→唐代末（椅子）　榻榻米：畳
奈良時代（胡床）→平安時代（倚子）→鎌倉時代（椅子）

表 4-6. 中国と日本の胡床の変遷表

周、春秋	戦国	漢	三国	晋	南北	隋	唐	五代	宋	元	明	清	現在
西域からの伝来 倚子		胡床：凳子，禅床　交床　縄床 凳は漢代に出現し　縄床 凳子を胡床と呼ぶ　凳：長凳 床から椅子出現						家具使用規定 胡床改称：交椅　交椅：直後背，圓後背 交椅に托首：太師椅　圏椅 条凳　春凳　杌凳　長凳 方凳出現　円凳，方凳 交椅：太師椅　交杌　交凳					馬扎 馬闌

縄文	弥生	古墳	大和	飛鳥	奈良	平　安	鎌倉	室町	江戸	現在
中国古典家具様式文化伝来 登呂遺跡：腰掛状木器（組立式）、					妙心寺：曲彖 赤漆欅木胡床（椅子式）　倚子 胡床（腰掛式）　『春日権現記絵』：胡床 『延喜式』：胡床 『法然上人絵伝』：腰掛 『一遍聖絵』：拝木				交椅 椅子 胡床 将几 凳 脚達	椅子 胡床 腰掛 踏台

名称変遷：東漢時代（縄床）→倚床（竹質倚床）→　唐代（倚子）→唐代末（椅子）　榻榻米：畳
奈良時代（胡床）→平安・室町時代（倚子）→江戸時代（胡床・椅子）→現代：椅子
胡床は神事用

考察およびまとめ

具の床（牀）と凳を中心に，調査で得られた文献史料を基に，中国と
る坐臥具文化比較表をまとめた（表 4 - 4)。その結果，両国の坐臥具文
する家具の名称と形態そして用途の共通性や相違性を，次のように検
らかにした。

時代の正倉院の御床と中国五代の木榻とは，形態が共通する坐臥具で
。御床には榻と同じ機能や構造がみられるが，御床には眼象（格狭間）
飾がなく，脚は貫構造で転びがあり，正倉院の榻足几と同一構造であ
つまり，榻足とは，脚に貫と転びを有するものを指したものと考察さ
る。

国における坐臥具である床（牀）や榻は，平安時代の御張や御張台そし
床子に形をとどめ，共通した機能性と構造形態が認められる。また，榻
縁台（椽台）や床几等とも共通した構造形態をもち，受容過程が確認さ
る。また，慈照寺東求堂にある室町時代の腰掛式榻や，江戸初期に建て
た桂離宮中書院にある楽器の間の西広縁にある腰掛のように，建築に
付けられて現存している。

具として請来した凳子は，平安や鎌倉時代から現在まで，腰掛として凳
の起源である胡床の名称で，現存して使用されている。

国の都市農村の住居では，現在でも低い姿勢の坐具として，凳子が椅子
化の延長として使い続けられている点に，中国の特色が見られる。

茶屋や床見世（店）の縁台と長腰掛（床几）に，北宋画『清名上河図』
見られる一卓二凳（1 つの卓と 2 つの凳セット）の様式と坐臥具文化の
通性がみられる。

（牀）や榻は坐臥具として日本に受け入れられ，存在していることが確
できた。それは，縁台や床几の坐具文化を形成した。交椅や圏椅などの
子は，日本では寺院や宮殿に限られて使用された。しかし，床子や腰掛
して縁台などに坐臥する姿勢は奈良時代からみられ，日本に坐臥具文化
存在することが明らかになった。

4章の参考文献および注

太田静六：寝殿造りの研究，吉川弘文館，902-840，1992　床の間や付書
そして棚と上段の源流は，中国の机や案や文卓そして床（牀）と榻が和

化して押し込んだ形であると私考される，とある。

石村真一，車正弘，石丸進：中国農村部における椅子と生活文化のかかわりに関する研究，研究年報，NO:27，住宅総合研究財団,77 - 88,2000,

石丸進：Receptivity and Transformation of Classic Chinese furniture in Japan, Third Asia Design Conference　Proceeding Volume 1,479-486 1998

蘇州紅木雕刻工場は明式家具生産地の１つである蘇州にあり，1954 年に創立されている。紅木を主に，木器を 400 種類生産している。

石丸進，石村真一：中国古典家具様式の日本への影響に関する研究，第48 回研究発表大会概要集，日本デザイン学会，90 - 91，2001

上海博物館の王正書氏は中国明清家具館の主任研究員で，この家具館には明代と清代の家具や室内，そして７種類の硬木家具材料が展示してある。

中国上海市にある家具情報センターで，家具研究を行い，雑誌『家具』を出版している。上海市家具研究所の協力を得て文献史料を収集した。

胡德生：浅談歴史的床和席，故宮博物院院刊，1，67-74，1988　漢代以前は人々は床に座り，席に膝をつけて座った。また，漢代に胡床と言われる坐具があり，隋朝時代に交床と呼ばれ，唐時代以後縄床と改称し，宋朝時代から交椅や大師椅になり，現代の馬扎となった，とある。

姜宗山：中国家具史図説，湖北美術出版社，110，2001

胡德生：中国古代家具，上海文化出版社，1，83 - 91，1992 出土した床の実物は，河南省信陽長台関の戦国時代の彩漆木床を代表とする。この木床は漆による彩絵の模様があり，技術は精密で装飾は華麗である。それは当時，床の使用がすでに普及していたことを示すものである。

王圻・王思義編集：三才図会，上海古籍出版社，中，器用十二巻，1323 - 1346，1988　明の宮室や器用など十四項目に分け，図入りで説明した百科全書で，1607 年に成る。

李德善，陳善鈺：中国古典家具，華中理工大学出版社，168 - 177，178 - 186，1998　脚凳とは，床に登る時に使用した。宋代には床凳と呼ばれた。現在の承足であり脚踏である。東漢時代に，胡床とは別に，僧人たちの坐具として縄床があった。椅子の呼び方の変遷は，東漢時代は縄床，唐時代は倚子，唐時代末から椅子である。

大河真躬：住まいの人類学，平凡社，235，1990

陳増弼：千年古榻，文物，6，文物出版社，66 - 69，1984　五代時代の古墳墓の中から 4 つの実物の木榻が出土した。この木榻の寸法や構造そしてデザインや材質と榫接ぎ構造そして加飾と加工方法などは，中国の家具史の中で重要な意味を持っている。榻の寸法は長さ 188cm×高さ 57cm×幅 94ｃｍの長方形四脚付き榻であり，框は留め形枘接ぎで，九本の材を簀子状に置き，両側は方胴付き枘で，框に指している。正倉院の御床と同一の構成原理の床であると考えられる。

前掲 10)王圻・王思義編集：三才図会，上海古籍出版社，中，器用十二巻，1323 - 1346，1988　明の宮室，器用など十四項目に分け，図入りで説明した百科全書で，1607 年に成る。

神国語大辞典，角川書店，49, 1995　に抜歩床は八鋪床の仮借，とある。

著者撮影 1988 年

前掲 1)，902-840

水川光賜：寝所と寝具の分化史，雄山閣出版，21 - 3 1，1984　床（ユカ）なる用語は平安朝以後の習慣で，床の意味は，寝具，寝台，寝所，床の間,畳のシン，トコ屋（髪結床）である。上代の床とは台床である。正倉院の御床のように床とは木製品の寝台や寝牀にほかならない。

小泉和子：家具，近藤出版社，72－73，84，1980 には「床子は上に人が乗って坐す涼み台の原型のようなものである。床几は茶店の茶売りの台が最初である。縁台（涼み台）は江戸初期に家屋の外側にある縁から来たことばである」とある。

並部紀夫：店棚の史的研究，3，デザイン学研究，52，日本デザイン学会，51，1985

寺島良安：和漢三才図会巻第八十三，1712，岡山大学図書館蔵

楊水：漫活胡床，文物，10，文物出版社，82 - 84，1982

黒板勝美編輯者：延期式，783-788，吉川弘文堂，1899

著者撮影 2004 年

陳増弼：千年古榻，文物，6，文物出版社，66 - 69，1984 前掲 14)

楊水：漫活胡床，文物，10，文物出版社，82 - 84，1982　「胡床が中国に浸透した時代は東漢後期で，霊帝は胡服，胡床，胡飯，胡舞などが好きであった。胡床の特徴は携帯しやすく両足を下に垂らし地面に着ける便利な坐具である」とある。三国や魏及晋そして南北朝の歴史書には，

著者撮影 1999 年
著者撮影 1999 年
著者撮影 1999 年
著者撮影 1999 年
著者撮影 1999 年
著者撮影 1999 年
著者撮影 1999 年
著者撮影 1999 年
著者撮影 1999 年
著者撮影 1999 年
著者撮影 1999 年
著者撮影 1999 年
著者撮影 1999 年
著者撮影 1999 年
著者撮影 1999 年
著者撮影 1999 年
岡田譲治：仏具大辞典，鎌倉新書，236-238，1906
清水乞：仏具辞典，33-34，東京堂出版，1902
陳増弼：太師椅考，文物,8，84-88，1983
太師椅は宋朝から始まった，折り畳み構造をもった交椅である。宋朝の交椅は４種類あり，直形搭脳が２種類と，円形（栲栳様）搭脳が２種類である。太師椅は太師交椅の略称といわれる。宋代後期の太師交椅の特徴は，蓮葉形の托首を背板の上に差込み，折り畳みができることである。明代には宋代の円形（栲栳様）搭脳の交椅が影響し，圏椅が出現した。圏椅を太師椅と呼んだ。圏椅と交椅の相違点は，圏椅は枠組固定構造で，交椅は折り畳み構造であることである。清代の太師椅は扶手椅といわれ，大型の肘付椅子で，交椅や圏椅ではなく，屏背式扶手椅が太師椅である。太師椅は学術的な家具名称表記ではなかったようである。
王正書：上海博物館蔵明代明器研究，南方文物,1，23-38,1993
陳増弼：太師椅考，文物,8，84-88，1983

戦争時に将軍らは，この種の家具を使っていたと書かれている。胡には西北域外からの輸入の意味がある。また，胡徳生：古代的椅和凳，故宮博物院，院刊 3，23 - 33，1996 に「唐時代には椅子や凳子の名前がなく，坐具で胡床や背もたれのあるものは縄床と呼ばれた。寺院で座禅する時に使うものは禅床と呼ばれた。胡床は隋朝時には交床と呼ばれ，宋代には交椅と呼ばれるようになった」とある。

三礼図：九巻。後漢の鄭玄らの撰。周礼や礼儀そして礼記の三礼につき，服飾や器用などを図解したもの。

胡徳生：伝統的家具与伝統的観念，家具，129，家具雑誌社，38-41，2002

中国ではまな板を俎椀と呼び，また椀と略称する。周代以後に俎は案の略称に代わる。祭祀用が俎で，日常生活に使用するものを案と称する，とある。しかし，几は案であり，几案と呼ぶとの説もある。

前掲 27)

前掲 27)

和名抄は倭名抄とも書き，源順撰『倭名類聚抄』二十巻である。平安時代の日本語化した漢語・唐土文化の摂取・同化するために，和名を漢語と対比することによって，意味による類聚を行うことを意図した内容である。家具（調度）に関するものとして，調度類上に文書具や仏塔具そして祭祀具があり，調度中に廚膳具や坐臥具そして屏障具がある。器皿部には木器類や竹器類が品目をあげて分類されている。

静岡市博物館には伊場遺跡から出土した，二つのまな板が収蔵されている。1 つは，下駄のように二本の脚が差込まれたもので，長さ 431mm×幅 114mm×高さ 130mm×天板厚さ 40mm のもので，時代は奈良時代前期といわれるが特定されていない。他は平安前期のものといわれる，長さ 480mm×幅 260mm×高さ 280mm×天板厚さ 50mm で四本脚が付き傾斜している。用材は天板がスギ，脚はヒノキといわれている。著者撮影 2001 年

三礼図：九巻。後漢の鄭玄らの撰。

登呂遺跡から出土した，弥生時代後期の腰掛状木器を実地調査した。

佐場修：風呂のはなし，鹿島出版社，71，1986

田中初夫，他：人倫訓蒙図彙，渡辺書店，271 - 272，1969

石丸進，石村真一：中国古典家具の日本への影響に関する研究，凳を中心として，デザイン学研究，第 48 回研究発表大会概要集，90-91，2001